



芭蕉公羽附合集集評注上卷

瓶の記

二十五条曰瓶ハ癸句の余情と氣色の
面ふくなるやうにさだ一瓶のちがら
持てる瓶のころるよ何らぞ

酒債尋常往不在

人生七十古來稀

詩阿きむどまをむさなる酒債サカテ

冬 傲日く水く馬ノスル加馬 經

癸句詩高人といひ酒債といひ詩人誣

流の何れさぬをのどろろをまげく冬
漱と音ましく用ひるよのまゝの裡と漢
句のまぎらつくりてむせ句の余情を
何らりたり水ごとくみなり粟の
依諧とて又一祈あり公卿いずべ正凡
のまゝ面目をばら水ぎる時のまゝいふ
バ常格とまぎら

霜月や鶴カウのつづくあらびかて
冬の初日乃何れ水ありり
けねいふとみ人のかごとまゝるん高き

秀逸なり冬のりき二句の間ふらぶが
めしけふが冬の白位解ふふの後く
水小を解きする時を却て分二ふま
体といひるよまき注といふなり
ものぬといふいりくひぐりて解け
いひたらるものよ何れ口を出さだか
あらざたがふものなり公卿もこの
の乃依諧ふりりくはめて正凡
のまゝ的をばら水らるよやまゝい
ね何れ水ごとくまゝるん高き

あしるバ卷中まゝ古調の海鳥は跡
まゝなるり何れも〜猿の意よ比を甚
何らきもの之はてその根鶴のつくく
あしるびみく〜と句づらめ此海鳥なるふ
韻字^{イムジ}ふても留む何れもあしりりやとい
ひほ〜たる〜を根の字跡とい
ふるも〜根才三ふまはり字の三跡
何れもゆりげ師軍更〜きけるる有
るれも花句の天〜てかちあたるもの
あしる根ハ地〜てのさるるるをとり

あしりも三ハ人ふ〜動くことせつさ
ざる根ハのさるる〜をとりあしりて動く
づるるをむねとさるるものなるがまづり
と動くづる韻字をもてるるるを本
式とま本式ハさるるいちま跡るり動く
まどきもの、動くハ異式なるるバは根
のめくありり或ハありりるるなるの
もとも動くかなもてるるるハその跡く
又ハ動くを風吹のたぐひ韻字〜假
名とも字〜らざるハ行跡あり才三ハ

紙とハヤ〜かりり〜飾くるみをつらちとる
おふ飾くが本式なり申すもてふて
らむたのどをまら用ゆるりハけかまも
とも飾くがおなりまれ才三のま飾
たゆり外の假名ハ行辨読字なるを
ハるの辨なりけまハ草天龍人の
ことわをまらざれば紙才三よククし
はれど極式とつふものハかりるぞくか
ハるぞくらざるものよてかりるが白づり
か〜のまありかりらざればハ〜り

世ふ宗道をいひ〜依譜をアハふ者
何よつけの固ふつけ侍るよ秘侍とつり
をつらり〜人をエラ探び〜侍ふるりハ
人成けりりてアタ價をむさばらむとての
まりざなま〜ハ依譜ふ侍るよ秘侍
とつり〜ハたあきもの〜ハハあづらぬ
り〜あり〜と〜あり〜けまハ草のよを
一たりのの秘侍のや〜よいふ者何ま〜を
こがま〜ハいひつ

檜 竹立一雪を人下のやどりハ

稿一つりね 口とつてそゆく

桑句旅 差ふ雪をいのちとまざる風 狂
の旅人ふうち厚く 稿よとつてそゆく
ふとやう乃けしきをつけたるありこ水
行脚の紙あり

時ハ秋を理をこめし 旅のつと

厚をとともぬふそく 凡の月

吾句ハ送ふの句あり時ハ時として秋
のあり水よたもろき時ハ不不不不
此ゆりきん何まさき 春をけしての

旅ふれハまはめく 何り水あるのちがめ
つとも何らむあつしくうらやまのく
ころ付れとつよそろをけく 何れが
わが身生渥旅より 旅ふれあらへ旅丁
とも森ある風や 流水のよるるま
身を何り水めすくつよ何いさつのは
なまてを旅よよむしり 詩奇とも
ふたふし

江戸橋くろかよいむぐまが水
薩^{サツ} 嶺^{リウ}の両相平か一りるる月

公おハか一つ〜江をさげあふとよるれ
 一ほごの人なきば時あ〜の度〜小
 江ををバ思ひ出ぬふらむ〜い〜る〜ろ
 を時あふ様〜志をり〜る但〜根も
 るの何いさつを〜け〜い〜も〜産場の
 ちぬふかつり〜るとちり〜れも吉洞
 ちぬきバけ〜らよハ解〜が〜
 ちろ〜ぬふ恰をめをちぬぬの産
 一おわ〜る〜子ぬるひ〜むれ
 き〜こ〜え〜るま〜よ〜て〜くわ〜く解〜ま〜のふ

及びぬ

時あ〜小産カキかり〜産むるの産
 火産の〜は〜小産を〜つ〜人
 桑向君ハ産を〜す〜〜出りぬ〜も
 門の産をバりきふ〜か〜産ぬ〜時由降
 産〜く〜ハ君が〜産にゆ〜〜は〜久
 をたの〜ま〜む〜産人〜ら〜や〜る
 小根さ〜れ〜び〜より〜ぬ〜ハ〜ゆ〜〜も〜ち〜り〜ま
 火産には本をた〜き〜時あをたの
 みぬ〜と〜つ〜ぬ〜〜ろ〜ち〜り〜産もた〜た

か見^ヒ彦^ダち^レり^ト早^ヒ下^リたる^{コト}を
つぐとハ^{コウ}滑^{ケイ}稽^ノの^{コト}バ

芭蕉^ハ狂^ハ分^ハ艾^ハ句^ハ小^ハ糸^ハ鞋^ハが^ハゆ^リ

月と紅^ハ花^ハ未^ハ成^ハ酒^ハの^{コト}を

吾^ハ句^ハハ^ハ羽^ハの^{コト} 芭蕉^ハ野^ハが^ハ〜[〜] 盤^ハ小^ハ
海^ハを^ハき[〜]く[〜]扱[〜]う[〜]あ[〜]とい[〜]つ[〜]る[〜]を[〜]き[〜]り[〜]

る^ハの^ハ句^ハ小^ハ糸^ハ鞋^ハが^ハ〜[〜]の^ハ句^ハ小^ハ糸^ハ鞋^ハが^ハ〜[〜]の^ハ句^ハ小^ハ糸^ハ鞋^ハが^ハ〜[〜]

吉^ハ酒^ハの^ハ一^ハ新^ハを^ハ水^ハが^ハ他^ハ意^ハい[〜]う[〜]も[〜]き[〜]り[〜]

た[〜]ど[〜]風[〜]流[〜]よ[〜]た[〜]つ[〜]〜[〜]の[〜]と[〜]を[〜]〜

て[〜]何[〜]〜[〜]もの[〜]な[〜]り[〜]と[〜]け[〜]〜[〜]り[〜]て[〜]か[〜]の

芭蕉^ハ野^ハが^ハ〜[〜]の^ハ句^ハ小^ハ糸^ハ鞋^ハが^ハ〜[〜]

盤^ハ小^ハを^ハき[〜]く[〜]扱[〜]う[〜]あ[〜]とい[〜]つ[〜]る[〜]を[〜]き[〜]り[〜]

句^ハの^ハ〜[〜]小^ハ芭蕉^ハ野^ハが^ハ〜[〜]の^ハ句^ハ小^ハ糸^ハ鞋^ハが^ハ〜[〜]

の[〜]〜[〜]バ[〜]よ[〜]〜[〜]り[〜]た[〜]が[〜]〜[〜]芭蕉^ハ野^ハが^ハ〜[〜]

〜[〜]何[〜]〜[〜]や[〜]ま[〜]の[〜]ま[〜]つ[〜]〜[〜]人[〜]た[〜]る[〜]ち[〜]ら[〜]む[〜]と[〜]

〜[〜]小[〜]芭蕉^ハ野^ハが^ハ〜[〜]の^ハ句^ハ小^ハ糸^ハ鞋^ハが^ハ〜[〜]

ど[〜]け[〜]不[〜]く[〜]何[〜]〜[〜]を[〜]見[〜]〜[〜]ち[〜]強[〜]〜[〜]り[〜]た[〜]る[〜]

〜[〜]何[〜]〜[〜]〜[〜]

宿^ハま^ハぬ^ハら^ハを^ハむ^ハ西^ハ川^ハち^ハら^ハバ^ハ秋^ハの^ハ巻^ハ

老意とま〜ふ風の破々

柔白ほいさうま〜市傍西行してまさば
あふ宿すおらとむむと向うけるまよいや西
行のめさ〜さるさき旅りまよてハな
老意とや〜〜風小破水安さきたり
あげぬる者よ〜〜とさ〜と
る旅ちあり老意ふ風の破々さ
へるひびきゆ〜ふやち〜柔白も公ね
のまよ西行をうらやめよ〜のま
ての破々あり

花の咲かながら草の空ろ

秋 千〜はる〜 條のくづをれ

柔白ハあうきんをあ〜さる他く公ねの
材が像儼なる然見〜何り水びんを
〜世小用ひ〜めばよ人のからふま
て國のニヤウもあづら〜むをきん
おなるをまのちの中ふからぬ〜そ
水けぬ小老のふ〜ちを〜からぬや
き水どろの人よ〜ハさ〜何りか
たきちんよ〜たぐひなくニヤウ

川合
上
したるあつろをかふけりく白つらりて子
のなほふ花の咲くを秋すしるあつ
うひなまをねハりがな城人のをりける
にねとろきてこいれうく 和入るるあ何
秋ふ志ふるく 蝶のみる 梨もなきく
づをねるる赤きふくことらいへと 辞儀
謙退のことバあり 他者の句をつくる
十七字十四字の間ふかぎりなるたて
ろ何りくく 口上をのづるがめー 後ふな
ふくくあつろをとく 欠ま

師の操むり 拾ハむ木のまか

さくたふそおの 秋は 四十一

み花白ねともふ古洞あふ小がきこえがに
解しねたりとも 毎々血のりく

霜の宿乃 詠藻は 飯屋をまて

古く人かやう乃 秋の末うり

み花白けききそお乃者ふはをちもの
もたのくく 時あらぬ飯屋をまをまお
らをもむいふのめげまのりつふせく 秋が
さむとあいさりたるこまこもふ飯屋

をさるるさるるふら何らぬどさるるさるるさるる
ものもあつらふさるるさるるさるるさるるさるる
たさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
のさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
ろさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
つらさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
るもさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
がさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
れど何らぬさるるさるるさるるさるるさるるさるる
ちさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

るの何れもさるるさるるさるるさるるさるるさるる
あさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

甘るるよさるるさるるさるるさるるさるるさるる

竹さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

祭向のつらさるるさるるさるるさるるさるるさるる
らさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
ゆさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
らさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

何や—まればよろづねもろく位なり—たれば
詠のくはをもちたぐさむもあらり、不
免さるるそろそ卯の花乃雪とハのめれ
ど卯の春といふゆいまで守ぎ依借
よてかくつらり水ふや何ゆれかまれば
泪の伴臭ましくようらぬことばるりまべ
くはぬの句をればとてコトゴトあましくめあなりと
おがえさるるハをうらなあり吉酒まはうら
ぬ句もたふしくころ
めづり—や—はる葉の中乃公羽中

潔ツギのカキとてをるる冬梅

五句ははる葉の中乃公羽中をとりける
凡情何となく白上あるふ冬梅は潔土
の若ふをさるる—おる夜の初ふを何ハさ
たるねたま

葉は落葉それほど神もほろろ

詠森のまねをみまゝ

アハハ

五句ははる葉の中乃公羽中をとりける
葉は落葉それほど神もほろろ
詠森のまねをみまゝ
よそとあましくつひさるる詞あり葉ははる葉の

中をかうくはまぐくの旅つらんぬふらむ
 がるれぬど神もほころびや旅ふやつま
 めふりもも見えぬやなまふころといひ
 なくはめたるあろえ旅をそれをしけく
 いやくた探もどぎらだ旅森のまのよたき
 ふやつはてそよハ眠をきらきらぬどの
 ありふよおぶさるくこくこたも
 精飯ヤキや伊る古の雪クダふキ
 砂きくめーりぐそ乃旅
 吾自けまきおららの旅ハ精飯吉伊

うら古の雪ふ露きらむきらめく総義
 めむハぬりりきまのうら又ハをーきし
 くもきうらむと僕人の旅をうらりる
 あろをうけくうもたむきのめく砂
 をふて来くのハきくめーとまらた
 る旅なりまきんく吾自旅人とい各
 きまがめく或ハゆきく或ハ人のまぶ
 衣ド或ハ人の袖をかへてやうくはま
 阿らぬといふ旅ハ五辨八辨の役阿
 ど吾自ハもと澄およて何のをいひ

舟
 二
 一

二
 一

出むもはうら水ぎ旅ハそ水よるをさるお
 ちれば人のことばふかぎりたのきさめくその
 時くのゆりきまきさくふはきバ五辨ハ
 辨ハ九辨十辨何りてもさるるだうらび
 せどさかふるさあなごハゆんの人よわり
 ふまきけてまめはまものたのきバ何さうち
 にからるべうらだ

いろくの名もむつや春の竹

~~~~~  
 篠ゆるなさはめぬる

傍の草辨の旅たまりそ花匂旅ともあり

のまのは春をく解をさるだ~~~~~何きら  
 けしあふ二十五条ふたりのあり

此君すわが宿せま 被水垢衣

ちがはくかたる風の なまき 草花

吾君ハ公およ君すら水く 子か者を卑下  
 したる他えぬらうく 旅ハそれ旅あり  
 さつ~~~~~西宿一まおめく~~~~~ババド  
 免くかや~~~~~の凡も草花り涼~~~~~きあふこ  
 うとほめ~~~~~のあり 風のたきものつ  
 くり~~~~~ハ依借あり

おらうお林太よさきーのよ化妻

田 桂とともれ 結乃 新起

吾昔句を田家ふとめたるちうし  
ろくねわたぐその坊ふをうけり

ろくねもまづうよやバからびざや

酒 志のあらふはごころの月

け酒もよたがよはあらど一房ぐぬのから  
びたるをきうつけたる李杜がまに秋  
夜蘭<sup>ルケ六</sup>なるまを酒志のくる影らむ  
のけりこかくたるやうにまを

まるとんてみまやみ流の田桂唄

心之何らた免むふ流のほろろ

吾昔句ハ結人よああゆーしみ流の田桂唄

をきうをむとそねハ罪をこゆるあハ衣

後成何らたむといふあふの流ふくみく

わがぬき<sup>ニヤニム</sup>流<sup>シム</sup>の何らこむだき衣

後もたうれバあ流の罪をふるまハせめ

てま之ちうとも何らた免むといふとろ

をけとぐぬまのまとかけりは流を世

み<sup>ツヒ</sup>流といふみ流といふあふ流と對し

田舎はらむぐくむく舞いくるさき

身もばやちかか子をちぎる彩の畑

ろの葉ををきふたをらむゆあぐい

これも揚ふ附ま〜たる〜みんゆあぐい 松の

下ま〜みほ〜い〜らめ〜あ〜の〜

いつる田舎の何めさ海見るがめ

時ぬ〜や〜花まで舞る 松のま

宿たふた 鶴をとむおらうま

五井白ふ〜や〜ゆき〜ゆ花の流ふ松のま  
を見く〜き〜年のぬ〜〜〜びらま〜ぐれに

何ひたらむぐく〜まで舞り〜花のま

東ぬふと〜ゆ〜るな〜ら〜ま〜ぐ〜ま〜時ぬて

やちれど〜ま〜志〜ぐ〜れ〜ぐ〜や〜も〜き〜ゆ〜ゆ

ま〜い〜度〜く〜時ぬふ何ゆる 松のま

植〜ト〜も〜何〜も〜ん〜き〜ま〜花の流すぐ〜ま

何舞り〜〜彩〜し〜げ〜た〜る〜い〜志〜ぐ〜れ〜し〜け

の〜を〜ひ〜た〜ま〜い〜げ〜り〜〜や〜も〜ゆ〜ゆ〜ま

らむぐた〜〜〜ぐ〜れ〜て〜や〜の〜か〜く〜れ〜ぐ〜や〜ら〜る

をきぬ〜赤〜を〜を〜舞〜よ〜た〜と〜〜か〜く〜る〜ま

鶴のよるべなき者た〜め〜の〜ゆ〜子〜君〜い〜ら



草のめき人なりと比喩しく阿のさし  
たるなり

奥底もなきて冬木の梢ふ

小春ふ首のうごくミナトの意虫

おれも阿いさつツの登向ゆく君と志の奥  
底もなしく冬木の梢乃めくさく  
まぐくも見えさくやうにアエカといふん  
をうけて保のわが方を謙徳しケムの意虫  
のやうなるは方も君が阿り小みコの小春  
は阿くまゆりふ首を動かすと子紹く

わきもけびよ梅より奥のそ敷枝

そ茶の湯も流る雪のひよ鳥

葉向ハ様よなうぶ山本といへるさうろ  
ろく梅の奥なるそ敷枝をわが梅  
は凡流も阿やうりうわきもけびよの  
阿いさつなり流ハけびよといふる細まり  
そ茶の湯とつけたのまぐかをひよるさ  
なりさうろ

わが様アイ割サ 枇杷の産葉ハ

心カケ見ミふ 動かく 山 茶 乃 花

おきも均不附くくはるるをさす

梅ふえく日永し梅といつり

東の窓心乃 虫葉よつ

桑白ハみりの山のやまをさふといむ  
そつり何れも花や咲べきといへる若水  
院よその席 髪のことバをかりて梅の  
花もちりよし梅ハまご候むはちがれ  
日をいうよくらちむとつらるる之根ハその  
時分のやうんそ外ハ何れもくく  
かきしあるは新の根ちり

いづくも榎の花は神ふちる

ひとりツ葉を梅の枝のひつさ

まことふけ根ちるハ葉白をたまけるま  
がらまくぬきま何らぞまごんぬ根の葉  
トかくは白のめくちるをだしつづくも榎  
の花乃神ふちるハ枝のひつさの葉  
梅ならで外ふつとぶやひもつとふ字  
つづくふのくたまけりくちり何れも  
るはあきりあ

樹ツツまよき葉ふさ者ツツの友雀

秋をこゆるくほらぬのしりし秋

くしも吾句の何よりをつけたるまじきもの

句をよみしむらり吾句も詠もよき句

晴吟の聖をかえる西日く

改 落くる草の穂乃く

吾句晴吟の聖をかえるふいさしめ

浦名との序例町と身く草の穂をい

西日とよみ改落くるゆらぐぬのりき

をつくしなふ秋草の風情をいさふ

そめとやいむふく心をつくべき詠

女鳥の羽もかいつくろひぬゆがれ

ひと吹風の木乃葉まづある

く水草の詠ありて句詠集の中

もも若首を依借する水白をい人乃

よくするふちありるもく詠集の依借

の法<sup>ホツケ</sup>ま<sup>ケ</sup>くたぐこの一ふふとあるま

ことよ正風のま面目とよべ

市中ハものみらひや夏の月

日者しくとしとく<sup>ハ</sup>のま

か一まづくも詠集の依借ふりていま

たぐふんの的くあれはくまのつまをこ  
ちよきご首の月へ涼しとてう何のま  
ち中のものみんひちらば暑くらめが  
るこつをたぐへおお白をゆへ見え  
欠くもゆめく後案ははるまをく  
涼しとてつふ山家のねちれ  
灰汁桶のまやもりまきり  
はりまきりく音森さるる秋  
花白シヨウ蕭くシツ鬚くの趣を見くねネ寂く  
莫くのカク顔をつけり灰汁桶のまや

とほやめバきりくまの鳴出さるるつら  
りまきりく音森さるるをれものやどり  
たふるぞり

芽出より二ふふなる柿のサキ実

白田の花ふかふる卵の花

翁と末が藤杯今ふ滞るあの時依  
借ちり花白ハ藤杯舎を顔さるる  
ねハまぐせつちり

そと葉の儀も何や生大根  
みけりハ籠る小窓のササ葉

花句をよみよみふせ大松のより何へとをう  
た化ありいづのも大松もききよもきき  
むかる家へかゝらざりてお定にともてふど  
らたふ煤の跡くくりくる山近き何より  
の古家と見くる程と

春風やおまの中ゆく 水の音  
帰るいさむつ花乃 ちよぐち

春うこ二句の間よ何ふあふり

葉経干き世の端やゆめ涼

葉 <sup>ア</sup> <sup>サ</sup> 花のとな <sup>ハ</sup> <sup>サ</sup> <sup>ニ</sup>

あつろこふ二句の趣を巻とバ都を二三里隔  
たる左よまのきとふとあれ家あたるがたハ  
ちひさきと川ちやぐれきと一の敷あつた  
てたハ山あふべ一 宗の庵よ世を巻て  
葉経干たるよその世はたなぐくあぬ  
まりて写中人の家内の涼とぬるきは  
やがて太の息きより室のちらつくを内  
の子ども乃見つけくふとゆくと葉経花  
るれ敷がけふ咲るあふら  
暁あらしふたや初秋の日敷ふ

新巻

暮もくらく吹 帷子<sup>カマヒラ</sup>乃 絞<sup>ミ</sup>

時々のつけあり

新巻はわざとまき 欠ぬ首<sup>カド</sup>金<sup>デ</sup>ふ

まぶ お改屋の定たるよりあり

係の系絆の尻まくくわくしの情をく

いふとりし句あり

帷子<sup>カマヒラ</sup>ハ日くふまきまぶ 野<sup>モズ</sup>の志<sup>ス</sup>

紐<sup>モミ</sup> 一針を 縮のこざ 何又

かまびらのまきはどくあゝの尻ハ野の志<sup>ス</sup>

しきりふて 乾々ハ下のりど 涼しきべし

服もろの時分を何にまき 縮くり時をつ

けりありけて 縮のこざ 何又 紐一針と

よく在ふの根絆をのべたり 在ふのま

れ公羽のはらりとハば句をまきまきとん

むべあり

雨<sup>ツ</sup>佳<sup>ル</sup>のれくく末ハ海ゆく 望かふ

雨<sup>ツ</sup>乃<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>し<sup>ラ</sup>を<sup>ハ</sup>何<sup>ハ</sup>ぐる粟の穂

秋映のやま 画もまきとりがく 望か

ハのまきくく 海ハ何まきゆく 時粟の穂は

中よりぬつと 公<sup>ツ</sup>穂<sup>ハ</sup>のかし<sup>ラ</sup>け<sup>ハ</sup>何<sup>ハ</sup>げ<sup>ハ</sup>

時

三十一

附合

らむハめづましきこちやをむせべて附合ハ  
二句一首の二句と見るをしといへばは解  
もがく一首よりいへるを

残る故小給美てある。秋きく  
餌ハムあがらふ足ある。深結ハコ

時ふと場ふとの深あり  
秋のくれ先くふらなうを

と秋小森やうり。秋に森やうり  
係の草絆ふて甚シヤラ洒落の深あり  
白ハ先くも秋晩の海邊やうり人里

意なく家も見えむいふをだうりよ

さびけりし。たけりさやあるを凡

驢ウマのひり結と見くかくはつけるるは

えソラ豆の花咲かりありあるの縁

星の水クサ鏡乃けしる。深川

場ふらるがめし。正凡のすいたく中なるべ

猿サ美ふまれくるをね乃松セウ海ウミ

日ハきりれど志づうあるるは

桑白ハ猿美ふたのれもねくをねのね

附合

三十一

まゝさがめしとつよころをあらむり紙もろ  
のころをいつらひたる紙何り

第三の歌

詩何きむど年をむけざる河俵は

冬<sup>ホコ</sup> 湖<sup>ニゲ</sup> 日<sup>ヒ</sup> 々<sup>々</sup> 水<sup>ミヅ</sup> 々<sup>々</sup> 馬<sup>ウマ</sup> 小<sup>コ</sup> 加<sup>カ</sup> 馬<sup>ウマ</sup> 裡<sup>リ</sup>

干<sup>ホコ</sup> 泥<sup>ニゲ</sup> ぎ<sup>ギ</sup> 夷<sup>ヒ</sup> 小<sup>コ</sup> 糸<sup>イト</sup> を<sup>ヲ</sup> ゆ<sup>ユ</sup> る<sup>ル</sup> さ<sup>サ</sup> ら<sup>ラ</sup> む

紙の歌もいつるめくこの時ハらまど風ハ  
入らざりし時な水ハのちふ正風のま面  
目をほられくる時の依替ハ何ひぐくこれ  
紙吉洞ともみちり 栗<sup>クリ</sup> 狎<sup>シヤ</sup> ともつ小<sup>コ</sup> 白<sup>シロ</sup> 毛<sup>モウ</sup> 毳<sup>キ</sup>  
句<sup>ク</sup> ず<sup>ズ</sup> り<sup>リ</sup> 牙<sup>キバ</sup> 三<sup>サン</sup> ま<sup>マ</sup> ぐ<sup>グ</sup> 漢<sup>カン</sup> の<sup>ノ</sup> ま<sup>マ</sup> ぐ<sup>グ</sup> く<sup>ク</sup> よ<sup>ヨ</sup> つ<sup>ツ</sup> ら<sup>ラ</sup> り<sup>リ</sup> た<sup>タ</sup>  
る<sup>ル</sup> な<sup>ナ</sup> り<sup>リ</sup> を<sup>ヲ</sup> べ<sup>ベ</sup> て<sup>テ</sup> 古<sup>コ</sup> 洞<sup>ドウ</sup> ハ<sup>ハ</sup> 漢<sup>カン</sup> 語<sup>ゴ</sup> 詩<sup>シ</sup> 依<sup>イ</sup> 替<sup>ヘ</sup> ち<sup>チ</sup> ぞ<sup>ゾ</sup> を



多くつらふをめぐりまきつるのふたれり  
 ると見えたりは水どけ花白ハ甘ら角が世の  
 待哥に何そぶ人を何ぎけりたるみて狐牙  
 三もろのころ何りといつりいづちあらむ  
 ぬ雪ヨ乃こもも袴ハカマとくゆる  
 雨相ふましくも教於教のめ  
 聖と業まで尋る蝶の玉をいしく  
 家くの冬の日ほ解よまづらくゆづる  
 水仙ハ見るるを春に花たゆめり  
 窓の雨目平ひらく業且

赤猫ふのら猫過る鳴りびく  
 花白ハ水仙ハ冬のもれなきごとくも冬のつそ  
 ぎよ見るるもあきて春ふなりてころな  
 が欠たまといふころ狐ハ花白ハ業且の  
 ことハ冬あはれど早春と見く業且を  
 つけるるならた才ニハ冬まきこも末の  
 りりさめなりく猫の意をつけり才三  
 の踏しやうみふかのみ  
 梅たえく日毛し様いまつく  
 東の窓乃虫業ふつく

巢の中ふ共ツの顔乃益びぬく

吾白ハ先ハ解ハたる海ハゆハ之ハ才ハ三ハやハ  
又ハ松ハのハ相ハふハてハつハけハ志ハるハもハ吾ハ白ハのハふハ何  
らぬやハよハつハりハたるハものハ之ハ才ハ三ハふハかハざハらハぬ  
まハなハくハ附ハ白ハふハ三ハ句ハのハわハくハりハをハ才ハ一ハとハま  
まハ山ハ灰ハやハらハらハにハ終ハとハハハ思ハりハ水ハぞ  
雪ハをハまハくハあハまハてハおハまハぐハらハのハ松  
海ハ之ハのハ子ハがハ鯨ハ友ハ告ハるハ見ハ吹ハく

桑ハ白ハハハはハ身ハ終ハふハ居ハなハぐハらハまハ山ハ灰ハのハ何ハた  
たりハあハるハにハ冬ハをハまハ忘ハれハ終ハをハ忘ハるハだハり

ありと之ハ松ハハハ吾ハ白ハのハ相ハ常ハのハふハまハ何ハら  
ぞハおハまハろハくハ住ハあハくハ何ハもハもハたハど  
人ハなハらハむハ雪ハ中ハのハ寒ハ波ハもハ懐ハ子ハもハちハ解  
おハまハぐハらハ意ハのハ松ハふハ雪ハのハかハるハをハたハがハむ  
るハまハぬハものハ者ハとハ見ハたハりハ才ハ三ハハハそのハふ  
をハりハたハるハくハ松ハのハ松ハをハ浦ハをハとハり  
あハ海ハ人ハのハ子ハらハがハ見ハ吹ハくハ鯨ハのハあハるハを  
告ハるハらハそハ之ハ附ハ合ハのハ本ハ旨ハみハるハりハり  
花ハのハ陰ハかハこハばハみハのハ花ハめハつハらハや  
おハくハやハたハらハむハ危ハはハ第ハ木

七夕の八日八もの、はびりくる

みせ向ハ何れのまゝなる新鼠ハその場不才  
三庭の筈本をたたくや掃むくつ少雲を  
星みせれば後然とくくたるとる今ゲムの又云  
たりの庭ふ小毎カキ握の葉たどりのちいらめ  
て七夕のたどりのを見せる風情才三ふ  
く見えさくり志うも花の陰よりちとさだ  
名人のよ縁心をつくべし  
小傾城ゲイゆきくちあぶらむまの巻  
院中インチュウだくりふかめのおきもの

吹まぐら襦のひごとね何うらみく

発白ハ其角なりか氷がんとなり溜タビを  
不フ騎キや〜世路をウラたむ〜つぬ小吉原  
たど〜ふ〜都ト櫻ウに〜徘徊ハして酒後〜平〜交〜  
るの〜を〜好〜き〜る〜お〜け〜向〜何〜れ〜ま〜と〜に〜か〜氷  
が〜本〜枝〜の〜白〜なり〜根〜ハ〜発〜向〜を〜一〜擲〜千〜  
金キムの〜公〜子〜と〜見〜た〜り〜と〜院〜中〜ふ〜た〜き〜もの  
ま〜る〜騎キ奢シヤ者〜を〜い〜ふ〜才〜三〜八〜條〜の〜引〜綱〜で〜院  
中〜ふ〜た〜き〜もの〜ま〜る〜ハ〜ち〜なる〜人〜あ〜ら〜だ〜ま〜と〜  
け〜を〜う〜き〜人〜乃〜や〜と〜ま〜ふ〜と〜り〜た〜り〜た〜ま〜

海合 七

三十五

まらぬほどふりどらよその夜  
火をうつさるる冬ゆらぐひさ  
一季の侍りハ妻にたさすわく

五葉白ハ徳人のたまはるその妙不まで火を  
うつさるる乃は唱の似海ひくさその  
ぞく清茶の麴をつひ才三八農家  
とわたりて冬の雪も成る母の心と定  
欠きを三白までつけると  
乃がぬもまづうふきけがらびすや  
酒をいぢらふはどろの月

み膳

襦袢はけし居よめでつらむ

五葉白はけし居よめでつらむ  
その夜は空と見くさぬまはかくむり  
空は居ある不自在あるものをとめ  
美丹一うつりりるとたむらるる  
まよふりたり

あをゆく粟の花さくは見え

いつきののそよ小啼ゆる 鐔

夕餉くふ徳が 外面に月ありて

五葉白はけし居よめでつらむ

飯時あり

と流や〜を又習ひらよかつて子

市の子どものよめるる面布

日記もてふまをならぬ涼〜

霞句おえち〜旅もろのゆふ〜

旅みよりあり〜夏の暑た申す涼〜

新〜とあり

洗足子家〜後のつくきさくらな

後館あり〜むささ乃里

みるゆ〜階子の溢を〜

きこえ〜るま〜むり

荊株や水田の〜乃秋のそえ

きり〜る日ふ代りゆ〜

夜〜一林下ハ馬乃き〜

朧白田野の秋色画〜

をの〜つ〜りオ〜

たり〜り〜夜〜

の優艶あるを〜

て〜潜格の詞な〜

たるも〜何よ〜人の及ぶ〜

年立き不皿小瓶乃花かくむ  
膝みののこころる花に世の本がらし

宵の月より海なる人小宿りし

奈向ハ王立之の佳<sup>カケラフ</sup>魚に曲<sup>キョク</sup>水の宴<sup>ユヱ</sup>乃學<sup>マナブ</sup>び  
をむしたむきたる之瓶ハ其<sup>イハレ</sup>夜<sup>ヨ</sup>平家<sup>ヘイカ</sup>を  
かこり出くるはまるり才<sup>イハレ</sup>二ハ將<sup>マサ</sup>ドてまづら  
たあるゆふと一何<sup>ナニ</sup>もハひこり月小對<sup>ツキコ</sup>して  
此<sup>コノ</sup>世<sup>ヨ</sup>がさなるり一<sup>ヒト</sup>なるハ其<sup>イハレ</sup>瓶<sup>ビン</sup>の之<sup>ノ</sup>を  
くをこめて奥<sup>ウラ</sup>小<sup>コ</sup>海<sup>ウミ</sup>をたるとるの此<sup>コノ</sup>世<sup>ヨ</sup>は  
ささくもせぬさまのこころ<sup>ココロ</sup>一<sup>ヒト</sup>なる<sup>ナリ</sup>海<sup>ウミ</sup>

入くる志<sup>シ</sup>小<sup>コ</sup>もの<sup>モノ</sup>の<sup>ノ</sup>まがごとく

新<sup>アタラ</sup>ま<sup>シ</sup>ハわざとさくめぬ首<sup>ウタ</sup>年<sup>トシ</sup>うま  
まのぐお板<sup>イタ</sup>屋<sup>ヤ</sup>のやとるうたなり

馬<sup>ウマ</sup>時のるこ<sup>コ</sup>は<sup>ハ</sup>し<sup>シ</sup>極<sup>キョク</sup>の<sup>ノ</sup>夜<sup>ヨ</sup>み

奈<sup>ナ</sup>向<sup>マウ</sup>瓶<sup>ビン</sup>ハ<sup>ハ</sup>え<sup>エ</sup>み<sup>ミ</sup>い<sup>イ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>つ<sup>ツ</sup>才<sup>イハレ</sup>三<sup>サン</sup>馬<sup>ウマ</sup>時<sup>トキ</sup>の<sup>ノ</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>ハ  
依<sup>ヨ</sup>踏<sup>ト</sup>なるべし<sup>シ</sup>一<sup>ヒト</sup>白<sup>シロ</sup>き<sup>キ</sup>お<sup>オ</sup>あ<sup>ア</sup>し

雪<sup>ユキ</sup>の<sup>ノ</sup>松<sup>マツ</sup>を<sup>ヲ</sup>小<sup>コ</sup>ち<sup>チ</sup>え<sup>エ</sup>る<sup>ル</sup>は<sup>ハ</sup>松<sup>マツ</sup>き<sup>キ</sup>し

日<sup>ヒ</sup>乃<sup>ノ</sup>出<sup>デ</sup>る<sup>ル</sup>お<sup>オ</sup>の<sup>ノ</sup>春<sup>ハル</sup>さ<sup>サ</sup>あ<sup>ア</sup>え<sup>エ</sup>  
下<sup>シタ</sup>者<sup>モノ</sup>を<sup>ヲ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>と<sup>ト</sup>船<sup>フネ</sup>渡<sup>ワタ</sup>み<sup>ミ</sup>こ<sup>コ</sup>ち<sup>チ</sup>ぬ<sup>ル</sup>

奈<sup>ナ</sup>向<sup>マウ</sup>ハ<sup>ハ</sup>雪<sup>ユキ</sup>を<sup>ヲ</sup>小<sup>コ</sup>の<sup>ノ</sup>松<sup>マツ</sup>を<sup>ヲ</sup>り<sup>リ</sup>く<sup>ク</sup>い<sup>イ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>り<sup>リ</sup>瓶<sup>ビン</sup>ハ

新古今

三十一

74  
上

三六

冬のり 死を妙嘆ぶるに阿まりあては  
はとぐれくよき句ハ解をむくまればかへつて  
第二義ハ落才三ハゆりき名高き句之  
公おこの句をかねくえらみねさく三幸  
までまゝれゆるがつひふとの巻の才三ハ  
出されゆるとちりゆき句ちのまゝくへく  
西相ふ今ゆくやお計ホトの星れば  
笛の音氷る阿つつさ乃橋  
いと番ツガヒ雀のまゝく森る松ありく  
桑句解もに古洞なるみ才三ハめでた

き正風終なり 阿まも又松あり  
松枝ふくくひ阿げるのまゝれば  
待ねも一ろくはゆるメカシ暮カシ  
ひくまらねぬづるホカヒハ下テタビ子風冬  
桑句解ハまきえたるまゝく才三ハま終  
なま句意いづちらむ解をん  
いろくま終なりまゆるの嵐ふふ  
みのまゝさ終のまおふがら飛  
大松れろたぬちにふく小て  
桑句解冬のゆめり死之才三ハあて

75  
上

三六

ふるんのかぐ中心のおちくらりておろろ  
うたすまぐまべうぐま味くらむとまゝに  
こゝまゝしまはらく口をつぐむの

牛流き村のなごぎや五月毎

すまふき地 梅 燈の花

一枚のさほふま森村 何ゆ

葉白りづなるよをねたまゝ

ふるあゆをたね新といひてたねの花

ふかる白多し 根は直ふて村をた

くさ梅燈の本あるだり 才三一枚の

さほふ居るがくめい ちる森 たる大本

の陰深しうりぬだ

美本屋水をあけ出く瓜の暑さ

野松子蟬の鳴立る去年

かちる何持もづりの人と吐し

葉白照つけける瓜をけま夏の何つは

思ひやべし 根よりたさりたす才三も

の何よりあく 徒累さぢの吐るるべし

うはりし縮の種なるの想う

存もたふきをぞ 海池乃水



新合

白壁の中より 礎うちろ矢て

み糸白のち代の中ころあるをいりよめでたきり  
ぎり之根ねもていたゞりたねひのた  
れどそとあゝろよハねんきよいつひたりが  
るめでたきち代中ころある國とて厚も  
え奈はぎとつふろと才ニハ引持どて  
白ねちのちちよりお出る礎の新しとな  
まきどふねちつめふ河らひのりめ  
松風小新酒をさすおのたきか  
月もかたむく石垣のち一

町の門出る 麻乃 飛くま

三句とも白くは明らうなり

第四句の註

二十五条より四句めハ注更大りのゆふと  
軽きといふハ發句根才ニまでふ音おこる  
おこるへーにやり句まゝにいひあつた  
きど一卷の亦変化はけ句よりたゞまるおこる  
お一合といはれしたるるりそく

齒<sup>シ</sup>朶<sup>ダ</sup>の葉を油<sup>ア</sup>指人乃<sup>ノ</sup>舌<sup>シ</sup>夏<sup>ナ</sup>夏<sup>ナ</sup>

かの虫のなにおし何けの春

才三ハ早春女とてめて指さるる人あは  
齒朶の葉を舌を矢のたふりけてゆくもろふ

らむりろの指人の獲<sup>ウ</sup>と何ひて國のま  
たのどふたしくする時水の門をねしぬる  
くさるもこえ又ハけ指人の侍<sup>サマ</sup>原<sup>ハラ</sup>のわざ  
とけあしたるやうにもきこゆづ水ふり  
たろろハあくるまきのいけまきゆふ

をつけたる

田<sup>タ</sup>標<sup>ヒラ</sup>わゆる緒<sup>イ</sup>のまき乃何くふ

よか子宿る民<sup>タ</sup>の中道

たもろき附合あり才三ハ緒のよけ  
のゆるふこやとハ思ひよるまじきを叶

山

三十三

の中乃宿ハ世ふをれものから水あまて何  
がー尹あどが街のまきと見むとて思ひ  
てとさきたるを一扱の宿きしころあり  
りし四轆りるあふと茶といつさかこきを結  
といつる一字もく甚ゆ〜ひづるを〜

かへる鴨かへらぬ鴨もけハ立〜

七シキ曙ヨウ山を 出くる 月

たぐり〜さをつけ〜七曙山と山の名ふ  
ま〜後ハ何〜山をせり〜よむぐ  
水せ〜〜宮森の石あ〜あふ〜

八ヤチ井イ鉢ハチの 十ジュウ年ネン 生ナマりル 寺テラ あり

才三ハ在ふよ〜何〜りふて家の前に  
流る川あり其川中ハ石をたき〜其  
う〜〜登森あるはま〜四向めハま〜に  
其何〜りをつけ〜るものありが〜つ〜と  
つけるも一鉢〜

月出よ井戸をからむ 酒もちて

辰 の 宮 電 の け ぶ る 秋 風

才三ハたよ井戸とありて酒をどの  
何〜ふなあるが〜音の月乃をや〜出ほ

熊谷 北

酒竹筒もちくく 依の扉を叩めて月  
を見むとなうちうちうちゆりき四句  
めハ扉をハ衣イ侮ド生シ臺トなるふりく初りま  
月見酒まりなどの抱息何るべきふふ何  
らざるを恭平タケヘイの代タ代トなれどそ扉を  
かりて酒もまのまのいりよるよて民の  
かまどいふざらひみりりといつる二首をよま  
たるありかつハ廿秋の豊秋トヨたのほをよま  
アッペー 名人の筆シユ段ダム 一ハ一ハ何らむや  
村るふ市の依を叩めて

町の申ゆく 川 ねとの月

オニのけしき村るふ城方の吹そひて市  
のかりを吹とらるしきさおのぞきゆぐれ四  
句めハ窓の面ハまぶかきゆぐれゆぐれの空  
けりげをくまめる。月うあといふさうよて  
さだりりの方風大るもたちよちりれて月  
のてりまをよするまぐて町中の川ねとく  
りよてる悔のりきいちうる  
旅人の風シラかきゆ 春さるく  
えたも おろぬ方刀のひさる

熊谷 北

三十一

才三よき句とまゝこそ依借のをうみ  
たのるぞう四句めその人がらを引る所  
たりまゝぞう附句にかゝるるのみあつらへつ  
くぞう風ふと念をそのつくるものくらば  
いつも附合ハ節うぎう死せるるべきを  
風ふた刀とつけたる依借の影こそまじ  
るをあらざるべしは極なるの白ふ  
あーとまゝ

掃ふをとて消る雪をやかすらむ

石の<sup>スミ</sup>なかに<sup>スミ</sup>墨を<sup>スミ</sup>掃り

消くる雪をうみかき掃ふとてかすらむ  
風流のえをと見て石のうがふまじ  
まて雪のながめは詩奇なぞかくさぬ  
したり

投げとて<sup>スミ</sup>の<sup>スミ</sup>編摺<sup>スミ</sup>をかこめて

風名林火ふゆ月のおぼの

きこえたるあはれどのをき句

野を屋敷の火繩もゆるまゆみ

山の阿なうと乃待きまゆみ

才三の春うらなひるるよふて四句めよ



詞ハナルきごとたのづらなる。春くるに何を  
 もたたく季の詞乃後句ハかく何るべき  
 ありあり

之般入ハたゞやぶつりて見とけりて

ちぐらちちながら 第もつちり

人<sup>ニ</sup>情<sup>シ</sup>世<sup>ヲ</sup>戀<sup>フ</sup> 二句のつるふつくせり

夏冬ハえなく橋をうけゆる

門小顔出さく 月のたぎくれ

弟三いつちるなふたハえなく橋とつちり  
 ハまらぬぞたゞおしくけハづしまる橋

を夏冬ハえなくとたもちりつひるな

まごと四句めハるのこつりなとまきて春

ハ花のため秋ハ月のためよかける橋よ

て夏冬ハえなくあらむとつけるあ

あり一旬のころハ下屋おたどの意

門小顔出さく物をこるはすく

於凡にむらふ合羽吹立こ

返し手のころちくちる。生もの

ちきよのころもなくらむ

家が著<sup>シム</sup>徒<sup>ガ</sup>を春のよまききんえ付

上のたよりには、  
これハ炭徳の一辨あり、  
家者位を春  
のよきまをとり付くる人ハ、  
采高人の位  
合よりく、  
采も此方ハ、  
さるはまこ

世第五句の歌

雨佳見る空の月かきりあり  
風吹ぬ秋の日カミ瓶カマ子酒カマなるる

古調ハ、  
お向ハ、  
の霍を、  
日乃、  
寂莫セキの、  
く、

旅ハ、

柳合 上

三ノ子 船 冥ハむ月々海

四句めハ朝敵テウテキのためよたうけはくひろふ  
空を流しまぬらま付控えめけをく  
まがかりしなる軍虫のねもけ之五句  
め強よてある冥べきに取ふ捨冥ふは合  
たのよになん人ならぬ人ともくさり  
七晴山をわたりくは月  
町づらり粟のこげる 砂をけ  
きこえがくしんぐ  
碎くき人の肩ふりて

けの賀れいで面白や能くぞ舞  
おの白酒くくめがかりてけのくきを  
賀のせと見せる附合なり 老シヤウ若ニヤウ子シが  
たのよをふくめるとるもあらむ  
いつら鳥エ帽ホ子のぬげる春凡  
眠るやら佳乃何さうぬ何さう  
四句めハ貴き人の魂何うびあるを  
白め白馬ハクバ驕オウく行ぎとらふ子のまを  
をつげり  
カ曰カ平ヘイたはまるるる原の雲



作合  
上  
下

入月の影他様くる衣老ひより

赤白習ふ手紙のたきほるとつ六階替の詞  
みてる原を習てをささくひそくの阿母とゆ  
くお習ハ手紙おぬれくるはまてくお向めお水  
を落衣老と身く阿やきまぐくの者れ  
ふるふねゆが入月のふぐらたふけさるふえ  
えぬど阿さりたすりゆくよくくお水がらや  
しからぬ衣老一騎落げさく一たるおゆえ  
阿さく人ならむとの附合あり  
川お顔おさく月乃たるる水

雨云 行くも秋の日とをればむぎ降

お白に月のくろくく晴くるるるるれど  
秋の白くをれたちのちかりめてかきさ  
まほどなくばむぎと降おくる存おの  
天衣なまきおぬるくべき附合のま際  
なま

嵐ふたむむ無乃細く片

桂木屋ハ桂木ふ刺をかきまらむ

お向を桂木屋の庭と見くる附合之  
狸おどさくお降張の弓

作合  
上  
下

長谷川  
上

まいら戸ふ暮る遠りくる暮乃月

四句めさしめくはびしきふと見くまいら戸  
ふ暮るのりひかめく人をも住ざなりける  
吉屋お乃はまおまごきこえそおま  
一灰うちたてくうめ一枚

まのちぬい船もみいらぎふ自由はよ  
おのきき伴おちをどふ下る時いらつもけ附句  
を思ひ出しく後まこぶるさぐり吉人乃  
まとりくなるぬり句をふきこえるま  
なれど道中のまぐく目る

ちあらんくうれし十の子

子代種べきものをはまぐく子のぬり  
お白十の盃あらべたるはるの酒をぬり  
何らで子の白れをあらむと思ひよめか  
つたぬ人の子のぬり何らとせよとの  
新ふつてり一句もこりきくぬる句め  
ていこめでたき句あり

は條はまづるは本をつてく

鰯がへるるとやがてく水の月  
四句めは條まづりのは本をつてく

長谷川  
上

家ぬふゆる夕ぐれのまぐろ五句めハ何  
つのもなくたぐれと見ゆるのまぐろ  
向るめかくまらしくときまふまぐろたぐ  
ここのやぐれまぐろもちうら何る句を  
正凡のたぐ申とりふ何るうとかがりハく  
ちのみそ

お市ふ人のたぐる夕月

木刀の音をまぐろ居合ぬき

仗具六律をまぐろ小都會ミヤウチの何りきぬ

紀行をまぐろ

上のたぐりふ何ぐる早のま

音の中をまぐろとまぐろ月のを

第四句の歌にまぐろ五句めまぐりみ  
商人の日和の晴まぐろ小價アサヒの高下を考  
るはまぐろ世まおまぐろまぐろものまぐろ  
まぐろまぐろまぐろまぐろまぐろのまぐろ  
のれまぐろまぐろまぐろまぐろ

ろつこのまぐろげまぐろのまぐろ中

や藤ふまぐろもまぐろ居ぬ音の月

まぐろ一るのまぐろまぐろまぐろまぐろの

はるるをけりて、さうさうつてのどけが、陽まを  
うらやとあり、さうめもその地を新うら  
ぶ、奥の産ぬふめい、乃森不似つらあ  
がら人のひり森てある者もたなく、月よむ  
うひく、酒のこゑるとつけるこ

混雑の記

既記巴後よみより、然のどけり

紙よえ、河をふるよ、紙衣

あよもい、るめくみる、栗の依、諧ハ解、  
かこさあり、あ向、臨、愁の志と見、く、然  
廷、小鳥帽子をぬぎ、く、紙えを、足る、宦  
を、辞、一、た、る、く、く、く、る、附、の、あ、ら、む、り

あ、ハ、返、さ、る、が、肝、意、を、大、集、子

雷鳥の幼者ハ、は、角、成、る、あ、ら、む

あ、向、ハ、韓、退、之、が、潮、州、ハ、何、り、る、時、の、心

あらむら後句に返さといふあり返さる

軒路を送るの序に唱るといふをまた

てたるよりゆく唱るの字一字の附と

校セウ焦セウ撰センつゝ詩のこを吹

朝鮮テウ西セ依イを贈オウる途あり

附さるるをあらむ解さる後句に大園の

あらむらむら

櫓ロ入ニきぬ乳ニハ十のオト荊オトあり

此所ア子シ胡コ産サンく世セを夷ウイあり

お向の櫓入きぬ人を男と見よと妻水

いひく心で懐句をこそ男となりてつれ

お向までハ女ありといふらとつれなるハ

ふふすありても様げらば何まゝと胡を

かきぬるはくぬ夷ありといふる

山ヤマ野ノ子シ知チし餅オウをむきなる

盗トウし井イの月ツキ子シ伯夷ハクイが口クチ洗シふ

お向岸の縁若くは何らで風粒の人と見て

伯夷が首コウ跡アト山ヤマにツキ巖イハをくひつひに死シす

るさるるを思ひ君キミ子シハカク一イツても血ケツ泉センの水ミヅ

お飲ノミむといふ法ホウをいひく飲ノミこそあやう

はき伯夷のめき<sup>ハク</sup>潔<sup>ケツ</sup>の人も是ハは子なら  
むと階<sup>カ</sup>替<sup>カ</sup>の伺<sup>ヒ</sup>之<sup>ノ</sup>監<sup>ケン</sup>自<sup>ジ</sup>水<sup>スイ</sup>を<sup>ヲ</sup>監<sup>ケン</sup>井<sup>ケン</sup>と<sup>カ</sup>へ<sup>ル</sup>  
も依<sup>ヨ</sup>諧<sup>ハ</sup>あらむ

<sup>アケボ</sup>嬰<sup>ボ</sup>の森<sup>ノ</sup>を<sup>ヲ</sup>母<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>け<sup>テ</sup>ま<sup>サ</sup>れ<sup>ル</sup>

つ<sup>ヒ</sup>子<sup>ハ</sup>森<sup>ノ</sup>人<sup>ニ</sup>あ<sup>ら</sup>じ<sup>ぎ</sup>ぬ<sup>り</sup>ら<sup>む</sup>

お<sup>の</sup>白<sup>ク</sup>ふ<sup>く</sup>つ<sup>つ</sup>み<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>ぎ</sup>ぬ<sup>り</sup>ら<sup>む</sup>も<sup>も</sup>出<sup>デ</sup>ぎ<sup>り</sup>ら<sup>む</sup>を<sup>を</sup>  
嬰<sup>ノ</sup>の<sup>森</sup>を<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>え<sup>ん</sup>む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>だ</sup>何<sup>レ</sup>一<sup>ヲ</sup>を<sup>ヲ</sup>母<sup>ハ</sup>  
の<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>ぎ</sup>ぬ<sup>り</sup>ら<sup>む</sup>之<sup>ノ</sup>後<sup>ニ</sup>白<sup>ク</sup>ま<sup>ら</sup>じ<sup>ぎ</sup>ぬ<sup>り</sup>ら<sup>む</sup>の<sup>故</sup>  
つ<sup>け</sup>て<sup>も</sup>も<sup>も</sup>一<sup>ニ</sup>ま<sup>ら</sup>じ<sup>ぎ</sup>ぬ<sup>り</sup>ら<sup>む</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>だ</sup>何<sup>レ</sup>一<sup>ヲ</sup>を<sup>ヲ</sup>母<sup>ハ</sup>  
に<sup>ハ</sup>せ<sup>ら</sup>じ<sup>ぎ</sup>ぬ<sup>り</sup>ら<sup>む</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>だ</sup>何<sup>レ</sup>一<sup>ヲ</sup>を<sup>ヲ</sup>母<sup>ハ</sup>

ふ<sup>な</sup>ま<sup>ら</sup>じ<sup>ぎ</sup>ぬ<sup>り</sup>ら<sup>む</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>だ</sup>何<sup>レ</sup>一<sup>ヲ</sup>を<sup>ヲ</sup>母<sup>ハ</sup>  
ひ<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>ぎ</sup>ぬ<sup>り</sup>ら<sup>む</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>だ</sup>何<sup>レ</sup>一<sup>ヲ</sup>を<sup>ヲ</sup>母<sup>ハ</sup>  
け<sup>め</sup>あ<sup>ま</sup>ら<sup>じ</sup>ぎ<sup>ぬ</sup>り<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>だ</sup>何<sup>レ</sup>一<sup>ヲ</sup>を<sup>ヲ</sup>母<sup>ハ</sup>  
ハ<sup>ま</sup>ら<sup>じ</sup>ぎ<sup>ぬ</sup>り<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>だ</sup>何<sup>レ</sup>一<sup>ヲ</sup>を<sup>ヲ</sup>母<sup>ハ</sup>  
ら<sup>ら</sup>じ<sup>ぎ</sup>ぬ<sup>り</sup>ら<sup>む</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>だ</sup>何<sup>レ</sup>一<sup>ヲ</sup>を<sup>ヲ</sup>母<sup>ハ</sup>

擗<sup>ハ</sup>体<sup>ハ</sup>か<sup>ら</sup>じ<sup>ぎ</sup>ぬ<sup>り</sup>ら<sup>む</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>だ</sup>何<sup>レ</sup>一<sup>ヲ</sup>を<sup>ヲ</sup>母<sup>ハ</sup>  
寸<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>河<sup>ハ</sup>さ<sup>ら</sup>じ<sup>ぎ</sup>ぬ<sup>り</sup>ら<sup>む</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>だ</sup>何<sup>レ</sup>一<sup>ヲ</sup>を<sup>ヲ</sup>母<sup>ハ</sup>

二<sup>ハ</sup>句<sup>ハ</sup>清<sup>ハ</sup>替<sup>ハ</sup>あり<sup>ら</sup>じ<sup>ぎ</sup>ぬ<sup>り</sup>ら<sup>む</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>だ</sup>何<sup>レ</sup>一<sup>ヲ</sup>を<sup>ヲ</sup>母<sup>ハ</sup>

月<sup>ノ</sup>の<sup>光</sup>が<sup>ら</sup>じ<sup>ぎ</sup>ぬ<sup>り</sup>ら<sup>む</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>だ</sup>何<sup>レ</sup>一<sup>ヲ</sup>を<sup>ヲ</sup>母<sup>ハ</sup>  
鳴<sup>ノ</sup>の<sup>羽</sup>ま<sup>ら</sup>じ<sup>ぎ</sup>ぬ<sup>り</sup>ら<sup>む</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>だ</sup>何<sup>レ</sup>一<sup>ヲ</sup>を<sup>ヲ</sup>母<sup>ハ</sup>



死—らぬ僧を笑ふ草花

月の白さめく 蕭條たるふと見く 時の羽  
さるふおあけさるり さまをわけ 後句猶どて 傍  
とらぬれ 終り後の世乃ととらぬれをもちえん  
ぬ更は 跡をさる 跡のわらふとらぬれ 階格  
あふど 終りへりぬ なるものか ぎのくはる  
ものあふ 終りへりぬ なるものか ぎのくはる

時 ぬ山崎 今 筆 を 舞

い 世 叶 の ごと たらを 終り へりぬ なるものか ぎのくはる

お 向 の 姿 子 の 姿 を 恋

一 の 娘 里 の 庄 屋 小 ざん はん

お 向 の 姿 子 の 姿 を 恋 ぬ 山崎 今 筆 を 舞  
こゝろ 終り へりぬ なるものか ぎのくはる  
へる け 末 後 句 へ 其 お 思 子 人 一 の 娘 さん 小  
お 向 の 姿 子 の 姿 を 恋 ぬ 山崎 今 筆 を 舞  
を 恋 ぬ 山崎 今 筆 を 舞

軒 名 ぶ た つ 子 顔 を 妻 見 八 里

時 なる 怨 の 君 と 啼 け 一 け

お 向 の 姿 子 の 姿 を 恋 ぬ 山崎 今 筆 を 舞



後句にさるるにちねみけのさたる池とすや  
 浮世よ流む空を<sup>カム</sup> 空の<sup>ビキ</sup> 影<sup>ヤカ</sup>  
 背ハ花を<sup>モ</sup> 舞<sup>モ</sup> 笠ハちむ<sup>モ</sup> 依  
 附合い<sup>モ</sup> あらむ句ハ笠ハ<sup>モ</sup> 天<sup>ゴ</sup> 天<sup>テ</sup> の  
 雪とい<sup>モ</sup> る詩法を<sup>モ</sup> しく<sup>モ</sup> 依<sup>モ</sup> 諸<sup>モ</sup> 一<sup>モ</sup> たる<sup>モ</sup> と  
 芭蕉<sup>モ</sup> 阿<sup>モ</sup> る<sup>モ</sup> 一<sup>モ</sup> の<sup>モ</sup> 怪<sup>モ</sup> ち<sup>モ</sup> く<sup>モ</sup> とも<sup>モ</sup> よ  
<sup>リ</sup> け<sup>ガ</sup> くる<sup>モ</sup> さい<sup>モ</sup> しい<sup>モ</sup> 大<sup>モ</sup> も<sup>モ</sup> くら<sup>モ</sup> しい<sup>モ</sup> ぞ<sup>モ</sup> や  
 お向<sup>モ</sup> 其<sup>モ</sup> 角<sup>モ</sup> が<sup>モ</sup> <sup>キ</sup> <sup>ヒメ</sup> <sup>ウ</sup> ま<sup>モ</sup> る<sup>モ</sup> まで<sup>モ</sup> お<sup>モ</sup> ぬ<sup>モ</sup> さま<sup>モ</sup> しい<sup>モ</sup> ひ<sup>モ</sup> け<sup>モ</sup> する  
 あり<sup>モ</sup> 後<sup>モ</sup> 句<sup>モ</sup> の<sup>モ</sup> り<sup>モ</sup> づ<sup>モ</sup> め<sup>モ</sup> と<sup>モ</sup> して<sup>モ</sup> たり<sup>モ</sup> け<sup>モ</sup> は<sup>モ</sup> 甘<sup>モ</sup>  
 角<sup>モ</sup> む<sup>モ</sup> しく<sup>モ</sup> いた<sup>モ</sup> る<sup>モ</sup> と

知<sup>モ</sup> 耳<sup>モ</sup> 入<sup>モ</sup> の<sup>モ</sup> ぶ<sup>モ</sup> づ<sup>モ</sup> ま<sup>モ</sup> しい<sup>モ</sup> ぬ<sup>モ</sup> き<sup>モ</sup> ぬ<sup>モ</sup> く  
 せ<sup>モ</sup> しく<sup>モ</sup> ひ<sup>モ</sup> や<sup>モ</sup> む<sup>モ</sup> づ<sup>モ</sup> 首<sup>モ</sup> う<sup>モ</sup> しく<sup>モ</sup> たり

お向<sup>モ</sup> 其<sup>モ</sup> 角<sup>モ</sup> が<sup>モ</sup> <sup>キ</sup> <sup>ヒメ</sup> <sup>ウ</sup> ま<sup>モ</sup> る<sup>モ</sup> まで<sup>モ</sup> お<sup>モ</sup> ぬ<sup>モ</sup> さま<sup>モ</sup> しい<sup>モ</sup> ひ<sup>モ</sup> け<sup>モ</sup> する  
 あり<sup>モ</sup> 後<sup>モ</sup> 句<sup>モ</sup> の<sup>モ</sup> り<sup>モ</sup> づ<sup>モ</sup> め<sup>モ</sup> と<sup>モ</sup> して<sup>モ</sup> たり<sup>モ</sup> け<sup>モ</sup> は<sup>モ</sup> 甘<sup>モ</sup>  
 角<sup>モ</sup> む<sup>モ</sup> しく<sup>モ</sup> いた<sup>モ</sup> る<sup>モ</sup> と

黒<sup>モ</sup> 細<sup>モ</sup> くら<sup>モ</sup> しい<sup>モ</sup> ね<sup>モ</sup> しく<sup>モ</sup> め<sup>モ</sup> が<sup>モ</sup> 影<sup>モ</sup>  
<sup>モ</sup> 小<sup>モ</sup> 葉<sup>モ</sup> 金<sup>モ</sup> ハ<sup>モ</sup> 小<sup>モ</sup> 葉<sup>モ</sup> 糸<sup>モ</sup> を<sup>モ</sup> 流<sup>モ</sup> る<sup>モ</sup>。

お向<sup>モ</sup> 其<sup>モ</sup> 角<sup>モ</sup> が<sup>モ</sup> <sup>キ</sup> <sup>ヒメ</sup> <sup>ウ</sup> ま<sup>モ</sup> る<sup>モ</sup> まで<sup>モ</sup> お<sup>モ</sup> ぬ<sup>モ</sup> さま<sup>モ</sup> しい<sup>モ</sup> ひ<sup>モ</sup> け<sup>モ</sup> する  
 あり<sup>モ</sup> 後<sup>モ</sup> 句<sup>モ</sup> の<sup>モ</sup> り<sup>モ</sup> づ<sup>モ</sup> め<sup>モ</sup> と<sup>モ</sup> して<sup>モ</sup> たり<sup>モ</sup> け<sup>モ</sup> は<sup>モ</sup> 甘<sup>モ</sup>  
 角<sup>モ</sup> む<sup>モ</sup> しく<sup>モ</sup> いた<sup>モ</sup> る<sup>モ</sup> と

お向<sup>モ</sup> 其<sup>モ</sup> 角<sup>モ</sup> が<sup>モ</sup> <sup>キ</sup> <sup>ヒメ</sup> <sup>ウ</sup> ま<sup>モ</sup> る<sup>モ</sup> まで<sup>モ</sup> お<sup>モ</sup> ぬ<sup>モ</sup> さま<sup>モ</sup> しい<sup>モ</sup> ひ<sup>モ</sup> け<sup>モ</sup> する  
 あり<sup>モ</sup> 後<sup>モ</sup> 句<sup>モ</sup> の<sup>モ</sup> り<sup>モ</sup> づ<sup>モ</sup> め<sup>モ</sup> と<sup>モ</sup> して<sup>モ</sup> たり<sup>モ</sup> け<sup>モ</sup> は<sup>モ</sup> 甘<sup>モ</sup>  
 角<sup>モ</sup> む<sup>モ</sup> しく<sup>モ</sup> いた<sup>モ</sup> る<sup>モ</sup> と



句の巻乃中の句よてまゐらちけそのたぐひ  
 予むぐ暮らみありといつる句の後句あり  
 後の黒細の句ハ詩高人季を念ふるは後  
 うめといつる葉句の流れは句のまゐらち干  
 流き葉小葉をゆるまらむといつる句の後  
 句よてまゐらちけり回ト巻目も何らぞはれん  
 黒細の句ハ予四句の終小なるをまをいん  
 ーくけ二句をバあらべらむいんまひがそ

とつ子る

杖カシ原モ友ガミ采サ標バの角を巻おむ

麈尾シニムを使ヒとまて荒海の流

昔白ハ琉球國リュウキョウクニあとの浦を北夷キタヒのまゐら  
 後句をその何より小麈尾シニムをけり予者の何  
 らむとの附句

秩ノボキの弓ユミえ 猛タケき世小出よ

虎トラ懐イダシ小娘メカる 何ナニりつき

昔句は猛き世小秩の弓も川つだき黄オウ旗キ  
 出よと之後句虎を懐イダシしふまゐらちけり見えて  
 世ヨハまひめて秩の弓えをまむとからの  
 物後ちと小たけり何れもくげあり

山寒く四圍の床をふく見  
づぐと火ききえく指乃ともび

いづちあらむ解きよる何とんぎ

西<sup>イ</sup>向<sup>ク</sup>を<sup>レ</sup>後<sup>アヤ</sup>ふつてお何やた

夏<sup>トシ</sup>いふ空<sup>ミヤカ</sup>城<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>ぐと吹<sup>フ</sup>洞<sup>ミホ</sup>るらむ

お向ハ抱<sup>ク</sup>女<sup>メ</sup>の<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>あぐと後<sup>ノ</sup>向<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>ぐと六<sup>ノ</sup>萩<sup>ノ</sup>の

ひみここ<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>世<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>萩<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>く<sup>ハ</sup>子<sup>ノ</sup>餅<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>ぐ

餅<sup>ノ</sup>お<sup>レ</sup>萩<sup>ノ</sup>も<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>

みちのく<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>夷<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>らぬ<sup>ハ</sup>石<sup>ノ</sup>白<sup>ノ</sup>

武<sup>ノ</sup>士の<sup>ノ</sup>體<sup>ノ</sup>は<sup>レ</sup>丸<sup>ノ</sup>藤<sup>ノ</sup>了<sup>ノ</sup>くらん

前<sup>ノ</sup>向<sup>ノ</sup>み<sup>チ</sup>の<sup>ノ</sup>く<sup>ハ</sup>夷<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>石<sup>ノ</sup>白<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>さ<sup>ハ</sup>見<sup>ハ</sup>らぬ<sup>ハ</sup>

後<sup>ノ</sup>向<sup>ノ</sup>ハ夷<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>毎<sup>ノ</sup>礼<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>さ<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>葛<sup>ノ</sup>城<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>君<sup>ノ</sup>は

い<sup>ハ</sup>りぬ<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>侍<sup>ノ</sup>らむ<sup>ハ</sup>

庭<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>が<sup>レ</sup>り<sup>ハ</sup>火<sup>ノ</sup>た<sup>レ</sup>る<sup>ハ</sup>た<sup>レ</sup>る<sup>ハ</sup>も

女<sup>ノ</sup>石<sup>ノ</sup>玉<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>は<sup>レ</sup>纏<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>うち<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>き

庭<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>が<sup>レ</sup>り<sup>ハ</sup>火<sup>ノ</sup>乃<sup>ハ</sup>孰<sup>ノ</sup>さ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>後<sup>ノ</sup>を

らむ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>を<sup>レ</sup>意<sup>ノ</sup>向<sup>ノ</sup>く<sup>ハ</sup>が<sup>レ</sup>り<sup>ハ</sup>火<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>流<sup>ノ</sup>す<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>た<sup>レ</sup>

火<sup>ノ</sup>く<sup>ハ</sup>玉<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>は<sup>レ</sup>練<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>宋<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>め<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>た<sup>レ</sup>ハ<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>玉<sup>ノ</sup>

風<sup>ノ</sup>情<sup>ノ</sup>は<sup>レ</sup>あ<sup>リ</sup>たる<sup>ハ</sup>附<sup>ノ</sup>向<sup>ノ</sup>く

ね<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>定<sup>ノ</sup>に<sup>ハ</sup>枝<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>ぐ<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ね

傘の陰枝かくらかこぶけく

お白堂の戸おろさぬこつよを傘ちりぐ  
仕りてあるふと見せる後白く

衣をたつ襪倉山の契匠一

まぬるたもと成白子凡葉

お白の衣きどと仲仏ちういく襪倉山の  
ねくふりこもさたる人ともささえ又ハかま  
ら山の仲仏にちういをきてたるともさ  
いづれちねぐやちうらむ短白いづれも思  
ひ入りてまぬるまもふ又凡葉の白ひ

白ひまわりくわりみく心を動いたまごと

もみせつある衣の焼るり

磬つつ方小鳥ゆる道

楯の葉よふぶ葉成之流り

お白磬つつかふ鳥のゆるは清果の地いり  
ふも居士ぬぢけ人の住をき何くりて定め  
世も人も見えだりれさふ葉成之屋  
るはまの附く楯の葉ふかくハあふぬぢけ  
ざあふだあらの葉あふあふあ ちを 松  
よて松の葉よといふも同ドるりちまご

挿の葉よ小舟かへりし月の何きバ線なきよも  
あらん

風の音たけらぶ菴ツテツ跌乃いりく

大口ウチ号する庭の雪ユキ拂

前白菴ツテツ跌の大方のうぐいすもぬらびて風  
の音たけらぶきままでの庭ハ平人の家  
小何らむときて庭の雪ユキ拂ハ大口ウチ号と  
する大葉の何りき庭をつけるもの

みりミをのぼるから梅子の赤

襷ツ花の條ハたねさお

いりちの附ツ言ハぬらむきとりがく古酒ハ  
ほむぬかする向たま

世の中を画ふのがいそる茶の煙

妹がりーら乃からぬや片ハた

お向ハ画師よ何らで画をぬき世りよまか  
いらでかく一ハ茶ハ飯ハ煮ハつて画よふけりぬる庭  
居たどの片ま之後向ハ画よかける女の髪  
たからりゆひとこいへる附向ま

羨ウラヤ飯ハきくハ金ハの吹風

津の園ハたかまハくハとおハりて

前句ハ夏人ハ何ル不の子守りく然るを金  
小ひより森しておし居れば夏のをれにまハ  
しくくキナク若遊ウツいらあらむとんきくはまるり  
ほ白い志を所らよき白よてたど船のりきを  
つけ総波りよりのおまのたふきよのたひ  
たよのよなきどなる句の次ふつのくまは難  
波とやちくくひくくはくはたる。お趣何  
ふよく筆ふたつくはむや

餅二かきぬえりそよ帯

昔原のちよみ子の白にねひらむ

蒸白いふお枕のおみ餅を用ゆる。り源氏  
お酒ちよどま何オモカケの餅もく何ま小かすれえ  
りそよめくるいりみちあべー後句ハ昔原  
の抱女乃いりひるよよとめあした  
りが庵ハ遊ふ宿りさ何くめよて  
髪たやさまをぬふ身ぬど  
冬の日北依階ハ家くのはま出くくわ  
しるどけつけ白を何よ人の涙みぬるよ宿る  
唐の人北髪ハやましく見よハりりかる人  
を産ふかくまふまぐくちめといへるべし

カゲ  
カゲ  
きこえぬ卒に嫁ふまどくと泣  
新造の曉きく火を焚く

お白中し小卒に嫁のふ字乃きえゆきな  
バもの思ひも存ららめくふ侍ハ目の茶は侍  
御くくかありはたし一ありるべし後白  
皇守の火を焚ぬるはま之きえぬといへる小  
新造のひきぬとまぬがく

二の尾ふ近漸の花乃はくりきく  
餘ハむぐらよと ぼりり ぬれりむ

前句二の尾とつふはわくりし一は君を侍

からげりし人の君もくれさをぬみてみづ  
らなるなり 君乃お言掬とふらひな  
は人ろの尾はものぐりきく人の君を侍  
裏へり或ハむりハまづり人々の  
里ふ下ゆき後句もまぐらろの人まで  
身ハ膝の産よきあよしかとちほきく  
今不 娘の火を放つ卒

盗人の記念の松乃吹をいり  
お白ハ思ひまけし 娘は火をほみつ小  
たごその糸をまつけくるあつ

何れもさの迷もとけし時を

秋水一斗もどつてまねず

お向はあまがら迷くをどしと抱ざるを長

きおといむとて秋水一斗とつらうらむと

水時計のりありよー冬の白は依階ハ

まど古油の体臭何となくかむつり此

りこるおさし

中よ本 撞をたさむ毘毘打

牛の政とあらふまのゆるらふ

お向は詩人儒者などのからめきたる紫

かり牛お人の何げつらみ計とが後群い

とよし

床あけく語れはいとある男

縁はまたげのねと跡をー

お向きとえたるま、あれどをりーお向え

後向はけいとこのためおむりー縁はあが

らねるるのあど思ひわくねあさなこ

け二向たれましく傾城士賣女のみふく

めれどろ水いろとびらふところ何とべら表

ふたろと置きよはとつとよし

明日ハ 敵 千 首 ねらめさむ

小二方ふ 子重とらせむとつこひ

茶白ハまことに 戦場せんばの白なれど 後白を

陣中じんちゆうのりふとくハ 何しらだき 立て公ぬ

附白ハ茶白のりをかへく 志うもよく 附く

拵多し け白のころハ たゞ 怪きりの 席と

碎意さいいのたふふハ 敵も 首ねらめ せよまぬ

肌どしとるは まるて ゆ三方とつ 子名ハ せり

化名なれハ 軍虫ぐんちゆうゆ 何るべき 名をまきとるこ

様ハ おし 併ひらき ゆる 宝不たからなのらるる

心算 起し 兵の 燭しやくと もーとく

ち小ハかぶるい くらのみ 甚ぞかハ せきとつ

子様ハ おとつ けく 小ハ 抱女だんなの 宝ハ 老ふ

るより 明らか 後白ハ 精せいどくハ かの 様ハ お

た一まハ うち 何ぐり する 玉たまとくハ 写

物もの一るや けき せり 女を つけたるこ

三味線さんまいせんからむ 子破こやの 孫人

道みちまがらみ 法ほうで おり 其友そのともを 忘る

凡狂おろこの 旅人りゆうじん あり だー

月つきふたくる 痛いたの 髪かみは 赤枯あかかて



変さぬ 破 隙 隙をまつ

と小八郎軍更が解いこす

海の家つとよ 糸ほつちり

袂より 硯をひらき 山陰子

山のたきまのひ 破つつ 風のりきあまこみ

見きごーがきき 流 綴 ちるるららの石

千 纏うちかけ 流 硯より 書いて 流るる

ちるるららら

灯の籠あつこみ 情くらぶる

ちるるららのちるるらら力を 綴るるらら

灯の籠あつこみ ちるるららと 対一たる

何り小あまのお 撰あつちり

まがき 近 津 比の 水み 籠 川 行

佛 喰 たる 魚 目 ぞ 記 けて

つるるの何さよ何さうたる 大魚の佛をく

ひたりへ何くまご 新き 慈 向るり 何

くのあより 何くの 佛れ 何がらと たるら

たるなる 古 おごりの 侍も 何りや

る 破 ちるるらら 自由らる

る 破 ちるるらら 花ちるるら

大合

春と目筋

雪の粒<sup>ユキ</sup>乃<sup>ノ</sup>園の<sup>ノ</sup>まめづり<sup>ニ</sup>記

襟<sup>エリ</sup>子<sup>コ</sup> 首<sup>タテ</sup>旗<sup>ノボリ</sup>が 片<sup>カタ</sup>被<sup>カ</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>く

お白<sup>シロ</sup>の雪のた<sup>た</sup>むき<sup>き</sup>ふ<sup>ふ</sup>国<sup>クニ</sup>のま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>なる<sup>なる</sup>風  
騒<sup>さわ</sup>の人<sup>ひと</sup>た<sup>た</sup>係<sup>けい</sup>乃<sup>の</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>似<sup>に</sup>株<sup>くわ</sup>置<sup>ま</sup>のた<sup>た</sup>む<sup>む</sup>小  
か<sup>か</sup>ー<sup>ー</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>他<sup>た</sup>あ<sup>あ</sup>り

けーの一<sup>いち</sup>ま<sup>ま</sup>ふ<sup>ふ</sup>名<sup>な</sup>を<sup>を</sup>こ<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>ま<sup>ま</sup>得<sup>と</sup>

三<sup>さん</sup>日<sup>にち</sup>月<sup>げつ</sup>乃<sup>の</sup>来<sup>きた</sup>ハ<sup>ハ</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup> 時<sup>とき</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>年<sup>ねん</sup>

前<sup>まへ</sup>白<sup>しろ</sup>ハ<sup>ハ</sup>一<sup>いち</sup>ま<sup>ま</sup>げ<sup>げ</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>見<sup>み</sup>て  
大<sup>だい</sup>悟<sup>ご</sup>一<sup>いち</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>が<sup>が</sup>く<sup>く</sup>後<sup>ご</sup>白<sup>しろ</sup>ハ<sup>ハ</sup>三<sup>さん</sup>日<sup>にち</sup>月<sup>げつ</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>

ハ<sup>ハ</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup> 時<sup>とき</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>時<sup>とき</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>ふ<sup>ふ</sup>い<sup>い</sup>よ<sup>よ</sup>く<sup>く</sup> 祿<sup>ろく</sup>心<sup>しん</sup>  
固<sup>こ</sup>を<sup>を</sup>た<sup>た</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>こ

ま<sup>ま</sup>が<sup>が</sup>ハ<sup>ハ</sup>飛<sup>と</sup>魂<sup>たま</sup> 花<sup>はな</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>げ<sup>げ</sup>よ<sup>よ</sup>入<sup>い</sup>

ろ<sup>ろ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>日<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>ふ<sup>ふ</sup>か<sup>か</sup>も<sup>も</sup>れ<sup>れ</sup>あ<sup>あ</sup>ど<sup>ど</sup>く

花<sup>はな</sup>に<sup>に</sup>こ<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup> 魂<sup>たま</sup>花<sup>はな</sup>ふ<sup>ふ</sup>入<sup>い</sup>を<sup>を</sup>西<sup>せい</sup>行<sup>ぎやう</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>ね<sup>ね</sup>が  
い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>ハ<sup>ハ</sup>花<sup>はな</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>げ<sup>げ</sup>よ<sup>よ</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>死<sup>し</sup>む<sup>む</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>乃<sup>の</sup>  
空<sup>そら</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>ほ<sup>ほ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>奇<sup>き</sup>を<sup>を</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>お<sup>お</sup>く<sup>く</sup> 西<sup>せい</sup>行<sup>ぎやう</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>  
空<sup>そら</sup>の<sup>の</sup>ふ<sup>ふ</sup>ふ<sup>ふ</sup>死<sup>し</sup>む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>り<sup>り</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>も<sup>も</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>く<sup>く</sup>  
ろ<sup>ろ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>死<sup>し</sup>た<sup>た</sup>一<sup>いち</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>係<sup>けい</sup>の<sup>の</sup>何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>西<sup>せい</sup>行<sup>ぎやう</sup>を<sup>を</sup>  
く<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>や<sup>や</sup>と<sup>と</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>公<sup>こう</sup>卿<sup>けい</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り

大合

五十一

控ら小くくゆるり知智の寂きる  
火たぐぬ火燃た人見む

赤白ハ知智鳥小たぐく人の世くら小る  
をいひたる之火たぐぬ火燃にくもあま  
しきものくちあき人の世もろつ小何ら  
らるべたけしきあらむ小赤白の世くら  
たる世を死りゆるる人にしるつけぬ  
冬まつ納豆たぐくあるべし  
花小位桜の微とまてふるる  
赤白秋季なる花をうけりてつけ

たよものあり白をハいぐならむ解が

西南小極の花乃つ不む時

桑の何がら小木つたる

赤白極の花とつあて月をもちたるよ一  
句の根幹からめきた小赤白の何がらの新  
ものをつけく何つらひたるく桑油桑膏  
とてけみくあまそぞ

穀多白糸糸茶のる

宣の日乃且を飛流のく起  
赤白糸茶のまいつちるや又たぐまけ

たゞよや後句ハ擬流ダ名波くもむとの  
いのり子宣のりく起くは茶のさきを茶  
ははまあり

深さるる曉アカサキ花ふかこまを

物衣の下子 寝るふ春風

茶句をりのまなごく見くめく曉の  
深ふむらひぬるはまは軍の出立ハ何ら  
ぬどねごやちあらぬ世あらがかりふまおの  
具をたるうぐだほえの下のまうちよるひ  
たるまごく

砂とほまき 茶葉切子ゆく

秋の只詠乃ち連歌いとかりふ

砂とほまきの葉きりふゆはいうもちまき歌  
の席なるべりいごお句のやうさけのねど  
ろりなるけりももあらざれば詠のちまき歌いと  
かりふとあまもりたるも古人の心をみゆる室  
なるま

其原き 山ヤマ橘ダイダイふけくら見む

麻アサ加里カサつよあツヨアの葉ハ阿む

お句うち何がりけるふと見て哥の葉拵ハカだ

は家としてけるあり麻りの八條の化名な  
 きど芦荻とも菰荻ともいふべきを麻りのよ  
 復をもとたふすむりかふる集も何よぎ  
 やの名をつらりたるまゝか  
 籠雲ゆるす本爪の山阿い  
 骨を身てるるよ泪ごとけり一り  
 卒雲の人をゆるす本爪の山阿いを何よ  
 神骨を身てりげめほどあかちあらむと  
 かちめもつものことき屋の人とら  
 はつけ合ふや

けー尼の小坊まりふうちむきて  
 をる蓮の夜たぐはきの実  
 作さるるや  
 豆腐つらり母の喪ふ入  
 え返の草乃袂も破ぬぞ  
 此切小喪ふともる人を作るのえ返と見  
 附合ありえ返ハ母ふ孝何り人  
 ひとり書をみる草の戸は中  
 二丁ほど西ふさぬはきりゆきり  
 ひとり虫をよむ草の戸ハ二三丁も村家を入

都合

だてたるを

櫛の凡乃豆がらをふく

寒き知小位持ハひとり柿むきて

茶匂いもも荒さのなま<sup>ツ</sup>げるやうま位

持の柿むきぬる寒が<sup>ツ</sup>るがぬ

小僧あつりずが<sup>ツ</sup>ままりる

能<sup>ツ</sup>祥の陰<sup>ツ</sup>おちあつるの酒を<sup>ツ</sup>

耕<sup>ツ</sup>輒の能<sup>ツ</sup>祥人ふ画をかきくあつるの酒

を飲さる破ふ小僧あつりずが<sup>ツ</sup>ままりる

五山あつりふ大さのたまる

赤衣ハ<sup>ツ</sup>笑<sup>ツ</sup>のをもてる<sup>ツ</sup>笑ひ<sup>ツ</sup>

官司が妻<sup>ツ</sup>平<sup>ツ</sup>保<sup>ツ</sup>られて<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>ぶ

前白とハ人を<sup>ツ</sup>へたる<sup>ツ</sup>附合<sup>ツ</sup>之<sup>ツ</sup>お<sup>ツ</sup>白<sup>ツ</sup>ハ<sup>ツ</sup>お<sup>ツ</sup>の

もち<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>笑<sup>ツ</sup>ひ<sup>ツ</sup>人<sup>ツ</sup>成<sup>ツ</sup>見<sup>ツ</sup>ゆ<sup>ツ</sup>恋<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>なり

後白ハ<sup>ツ</sup>お<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>き<sup>ツ</sup>お<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>もち<sup>ツ</sup>て<sup>ツ</sup>笑<sup>ツ</sup>ひ<sup>ツ</sup>を<sup>ツ</sup>ま<sup>ツ</sup>り

が妻<sup>ツ</sup>お<sup>ツ</sup>思<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>れ<sup>ツ</sup>た<sup>ツ</sup>ると<sup>ツ</sup>い<sup>ツ</sup>ふ<sup>ツ</sup>が<sup>ツ</sup>

入<sup>ツ</sup>月<sup>ツ</sup>平<sup>ツ</sup>騎<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>る<sup>ツ</sup>は<sup>ツ</sup>わ<sup>ツ</sup>る<sup>ツ</sup>

駕<sup>ツ</sup>なき<sup>ツ</sup>園<sup>ツ</sup>乃<sup>ツ</sup>露<sup>ツ</sup>負<sup>ツ</sup>水<sup>ツ</sup>ゆ<sup>ツ</sup>

一<sup>ツ</sup>論<sup>ツ</sup>笑<sup>ツ</sup>一<sup>ツ</sup>芍<sup>ツ</sup>薬<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>定<sup>ツ</sup>

付

六十一

碁の工夫二日守る。目を喰く

おもしなき附合之何ぐとよぶもほどの碁  
うちの人と半うちけく勝負いつの日  
めむと契りはくあふかへり定のもとふまづ  
ふ居てんにあざりし子を二日まで工夫  
しやうし思ひつきる。あふ目をひらき  
見れば定おの昔茶一痛嘆おる人  
笠おてえのやぶき縋りぬ。

秋の鳥乃人くひしゆく

け句や人を秋ニウサツ殺コロす鳥山何ぞしゆなど

のたへをものとも思ひたらでまのよふま  
しき破きえん縋りぬ。ともものを見て附  
た。之附ぐるらゑばらく。あて一句のやうき  
秋といふ字のゆくまわりた。はぶくま  
はたらりしよ何らざんがかる句をばくしゆ  
り。

英人のかちちねむうげろふ

蝦夷エの知耳ガ奉たた様と身を倦く

玉タマ照テ君キミが古コるルをミくミくの他タと

京キョウ小コ名ナ高タカしの痛イタの呪咀ク

母士の松をいさ見く馬小葉をうら

まこしきこえがくらんぞ強くいりぞお向八葉

居て海の呪咀ふめをほくく人之後向う水

成將どくこの母士乃松をいさ見くする

手あゆく何や一げなる男八京小若さるる海

の呪咀何ありとつよくろあらむらぬ不た

やうあらぬ

月あくち圭のひびきハッるく

棺 いそぐ 消ぐくの霧

お向月もあくと西ふかぐまきちまをまけ

ハッ射とつよものまごまけしきをゆく見定めて

人の今死くる宿中たり

高野の懸小畠 つらりく

紅染の夜葉の千花の道を 往り

何りのまのなる 伏合をうべ

酒飲む 姨のいふ淋一た

双六のうらみを 舩に幸つく

酒好の姨より舩のまゝるはまふつけりき

のふれ双といよまけくるりねうら免しきみど

何りてあふぬらふハとむらふ人もたや 君ハ



いづれあざどそののぎー ききききするの淋しうらむ  
と思ひやりたるはまら

髪下衣付従が娘をまらへく

聖の宮乃何らし 改王され陸

茶白ハ髪下ーく 嵯山宗りくわふかふるはま

と身くかゝるさゆりにゆえ何の聖のまゆま  
さをつけたるこ

新者たる 畠頼名月の露

面白の抱女乃 秋の萩きぐらヤ

まの指滑 帛糸何らで 風流のたれ人乃

まの指たなるべー

川激ゆく 髪告モトヒを 角小 結付く

舍利とる 滝小 乾日くつらま

古瀬なるハ 絆一かき ぎべく 古瀬もまら

洞あたらぬ何里のちの 洞もまら 洞何りこの境

よのつらつべー

洞激小 洒を かく 執 様 屋

かよの〜 女小 カキコ ねん ねん ねん ねん

いづれあざどそののぎー

まらぬ〜 田のいろえ乃まをばり

三 三 三 船 屋 川 乃 叔

木のきと川川の叔をきらぬが解ある事を

わざ

花 <sup>カキ</sup> 出 <sup>カキ</sup> ちある <sup>カキ</sup> 味 <sup>カキ</sup> ら <sup>カキ</sup> ぎ <sup>カキ</sup> の <sup>カキ</sup> 暮 <sup>カキ</sup> 暮 <sup>カキ</sup>

いふ <sup>モ</sup> 百 <sup>ズ</sup> 舌 <sup>ズ</sup> 多 <sup>ズ</sup> 吹 <sup>ズ</sup> 矢 <sup>ズ</sup> を <sup>ズ</sup> 負 <sup>ズ</sup> ち <sup>ズ</sup> ぐ <sup>ズ</sup> ら

田野之秋色

月 <sup>ツキ</sup> 明 <sup>ツキ</sup> く <sup>ツキ</sup> 赤 <sup>ツキ</sup> 板 <sup>ツキ</sup> 山 <sup>ツキ</sup> を <sup>ツキ</sup> 見 <sup>ツキ</sup> づ <sup>ツキ</sup> つ <sup>ツキ</sup> ら <sup>ツキ</sup> む

雨 <sup>アメ</sup> 之 <sup>ノ</sup> 叔 <sup>ヲ</sup> 益 <sup>トシ</sup> の <sup>トシ</sup> 法 <sup>トシ</sup> 埋 <sup>トシ</sup> む <sup>トシ</sup> あり

大 <sup>オホ</sup> 盗 <sup>トウ</sup> 人 <sup>トウ</sup> の <sup>トウ</sup> 入 <sup>トウ</sup> り <sup>トウ</sup> 一 <sup>トウ</sup> 夜 <sup>トウ</sup> あり <sup>トウ</sup> 一 <sup>トウ</sup> 何 <sup>トウ</sup> が <sup>トウ</sup> 盗 <sup>トウ</sup> 人 <sup>トウ</sup>  
の <sup>トウ</sup> 覺 <sup>トウ</sup> を <sup>トウ</sup> む <sup>トウ</sup> び <sup>トウ</sup> び <sup>トウ</sup> 何 <sup>トウ</sup> が <sup>トウ</sup> 盗 <sup>トウ</sup> 人 <sup>トウ</sup> が <sup>トウ</sup> 家 <sup>トウ</sup> へ <sup>トウ</sup> 入 <sup>トウ</sup> り

何 <sup>ナニ</sup> く <sup>ナニ</sup> 山 <sup>ナニ</sup> を <sup>ナニ</sup> 志 <sup>ナニ</sup> ぶ <sup>ナニ</sup> ぐ <sup>ナニ</sup> ち <sup>ナニ</sup> め <sup>ナニ</sup> ぐ <sup>ナニ</sup> 何 <sup>ナニ</sup> の <sup>ナニ</sup> が <sup>ナニ</sup> づ <sup>ナニ</sup> り <sup>ナニ</sup> あり

よ <sup>ヨ</sup> くの <sup>ヨ</sup> 何 <sup>ヨ</sup> の <sup>ヨ</sup> 事 <sup>ヨ</sup> あり

ひと <sup>ヒト</sup> 川 <sup>カハ</sup> 兔 <sup>ウサギ</sup> の <sup>ウサギ</sup> 瓜 <sup>ウリ</sup> くら <sup>ウリ</sup> くら <sup>ウリ</sup> あり

の <sup>ノ</sup> 立 <sup>タチ</sup> み <sup>ミ</sup> あり <sup>ミ</sup> 人 <sup>ヒト</sup> の <sup>ヒト</sup> 洋 <sup>ヨウ</sup> ふ <sup>ヨウ</sup> と <sup>ヨウ</sup> ぢ <sup>ヨウ</sup> ら <sup>ヨウ</sup> け <sup>ヨウ</sup> く

た <sup>タ</sup> り <sup>タ</sup> く <sup>タ</sup> の <sup>タ</sup> 立 <sup>タチ</sup> み <sup>ミ</sup> あり <sup>ミ</sup> 人 <sup>ヒト</sup> の <sup>ヒト</sup> 洋 <sup>ヨウ</sup> ふ <sup>ヨウ</sup> か <sup>ヨウ</sup> くら <sup>ヨウ</sup> む <sup>ヨウ</sup> こと <sup>ヨウ</sup> して

人 <sup>ヒト</sup> 家 <sup>カ</sup> だ <sup>ダ</sup> 附 <sup>ツキ</sup> を <sup>ツキ</sup> い <sup>ツキ</sup> つ <sup>ツキ</sup> り <sup>ツキ</sup> か <sup>ツキ</sup> き <sup>ツキ</sup> ば <sup>ツキ</sup> 兔 <sup>ウサギ</sup> の <sup>ウサギ</sup> 瓜 <sup>ウリ</sup> くら <sup>ウリ</sup> あり

う <sup>ウ</sup> ぞ <sup>ゾ</sup> ぐ <sup>グ</sup>

風 <sup>カゼ</sup> くら <sup>カゼ</sup> き <sup>カゼ</sup> 大 <sup>オホ</sup> 事 <sup>コト</sup> の <sup>コト</sup> 叔 <sup>ヲ</sup> ね <sup>ネ</sup> 七 <sup>ナナ</sup> っ <sup>ナナ</sup> 中 <sup>ナナ</sup>

川 <sup>カハ</sup> 門 <sup>カド</sup> を <sup>カド</sup> た <sup>カド</sup> ぐ <sup>カド</sup> 生 <sup>ナマ</sup> 理 <sup>リ</sup> の <sup>リ</sup> 美 <sup>ミ</sup> 矢 <sup>ヤ</sup>

前 <sup>マエ</sup> 向 <sup>ムカ</sup> 大 <sup>オホ</sup> 事 <sup>コト</sup> の <sup>コト</sup> 叔 <sup>ヲ</sup> 後 <sup>ノチ</sup> 向 <sup>ムカ</sup> 八 <sup>ヤチ</sup> 文 <sup>モン</sup> 日 <sup>ニチ</sup> の <sup>ニチ</sup> 叔 <sup>ヲ</sup> 附 <sup>ツキ</sup> 意 <sup>イ</sup> 八 <sup>ヤチ</sup> 何 <sup>ナニ</sup>

世のまゝに

宿のちぢミヤゲ小拵子をほる。

えなふ歌のま歌キ付く

拵子をキ付く宿のみやげふまゝ。人をま歌

師と見えく。附句之

ふ玉の髪ミき。女メにきて

えを見やが。朝アの月

ふ玉ハミ秋アキの月のツキとト思オモひく思オモひ

らニきニあハるも羽ハネゆハ通ス思オモひの舟フネにたらちぬ

のかキきとてもふ玉フタ乃ノりが思オモひなな

でどぢぢやア何ニりルむといへるを思オモひく髪カミももより

思オモひのあらればふ玉フタの髪と依借ヨりひて

ははくく附ツくらハふくちぢぢりる。女メの髪

ふまりてりきハかく思ひきくく。尼ニよあるも

たりは世セハたゞまなまがる。の中あらればな

にならなのも思オモひを思オモひかくる。ささききく

。ささかさよ思ひ入むゆりハのちの世れる

ころたろろ。ハハ思オモひをえぬ。う

のもいハむく。ままり。ながゆめをてけて

と一念イハホツキを一たちのちを思ひを思オモひがりる

付合 上 三十一

はまのりの氣がぬるりよしくほはぐさのまを  
きんしちるん

陰なき於朝オゴのかづらりめ道

ひま指くもあふるる 瘦 男

浦多の御ミコ置シのりーたあめい

うちかづくお糸のまをちあつて

たのきくくと天と 証 買 ぬゆ

はまのりのことお名高き恋の句まこと

恋の情をつくせりつづいお句いひ

もの、はまのりのをたぐあつてみといへる

より何の川持ドてあふいやうらぬ人のた  
はぶれまいやりさもののよみぬひーたるはまた  
あつて恋のまことたのべた。えもいひあめ  
でた

入日の何と乃星あつてつ

宮あが健持つも 花のるん

星あつてつあつたのよきまみえろめたを

社家のゆめがれと見えくまあがた灯の健

つぎよゆくまがごをつけける画も及び

スキキ 層をたぐいふふたはり

作合 上

羽比ね巴負く麻守入篠の隈  
舟を切て管にふくえき人の船より羽比巴  
負おく山くげの公篠の隈み只ひとりかきあら  
して麻の着をすつらま何くまでえきくる人  
ありらま

侘ねもしろく 椽の粥者ある

更級の里乃きぬこをおふゆき

こもねをドえき人の椽ねかゆ老る俺ね  
あつらばけりしあのを破おふゆくもろべ  
雨路を相おぼく 溜る馬の血

坊主ども老ともいさぎ 遠きよ

土の餅つく 舟のみねろろ

三句ともちぢりりのころちや

生心陰に焼つく煙るもあり

日くれてあゆる 松が切け

山家のやうさくさくがめし

ま白な塩なた飯をつき向く

泪干 顔をよごれ 目 さま

糸白麻者の藤治のためは塩ぐちさくと  
見えく目病成つけるをめ

香根小念仏をやしふ居士衣  
小懐ハ縮の中ふつこく

小懐下の片まこ

杖でくつ産路が破上もあり

いぢりふびむや嬢族の月

七目ふいぢりを對しける附句えれも又二殊

花は花は垣松取穿つ 草宿

かげろふまき 紐の 下敷

身のくさも芥子の足袋よ春とちて

かげろふの句ハおの場ふのちの句勝ドてお負

——くきき人のきれど一巻もちける男ふれ  
芥子のたきけよ何みてからき世をのころき  
またあり

私白泉のかづら 桶の巻をとる

柴垣のふるき 朝ハ 破まきあり

き屏意

土質もよむより 柱ハ 黒石

年寄の恐びくわき 秋の風

黒石の場ふあるべし

坂友さる 宵の月ふひりめく

冬より西の吐乃松回し  
 髪さるる宵の人くねしならびたる中  
 小西国北のどをゆくきりたる人乃ものか  
 まるに髪さるる人の下とろ何れも松回  
 内まへ

彌子 玉子ハ何とくあらむ  
 山 菜の花の傍ハ水仙 梅 棗

二句ともあさるるろなるれどたごひならん  
 たる之附合の中ハ必かる句何るべし上  
 ハやくやりの句をさるる之あつたべし

雪小 鞍 ねくハ貫が馬

やどり七む大江の岸乃ハる家

雪に騎ぬるハ貫がるハ大江の岸小やどら

割 髪らつて 状 におの 甚

清 深 叛も先 酒りぬ 室は 沙汰

おもしるきつけ句之度くの状通ハゆき  
 人に見うくハ深叛のお後とふさめさる  
 の清深叛をまことしやふつくらバを  
 まじき奴ハ深叛も金ふつまりくものりぬ

いよハ階梯の新趣な里

宜松が、ま<sup>ハ</sup>子も 虚<sup>ウツ</sup>つく

花<sup>ハ</sup>ぐも里 物<sup>モノ</sup>も 物<sup>モノ</sup>を 思<sup>オモ</sup>ふらむ

二句<sup>ニク</sup>をよみていづれもを<sup>ヲ</sup>き 化<sup>カ</sup>あり 句<sup>ク</sup>を

き<sup>キ</sup>え<sup>エ</sup>るま<sup>マ</sup>なる

森の 柵<sup>サシ</sup> 子<sup>コ</sup>鳥<sup>トリ</sup>を<sup>ヲ</sup>た<sup>タ</sup>ぐめ<sup>メ</sup>

子<sup>コ</sup>鳥<sup>トリ</sup>の<sup>ノ</sup>居<sup>イ</sup>る<sup>ル</sup> 花<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup> 糸<sup>イト</sup>を<sup>ヲ</sup>よ<sup>ヨ</sup>め<sup>メ</sup>

け<sup>ケ</sup>句<sup>ク</sup>の<sup>ノ</sup>よ<sup>ヨ</sup>つ<sup>ツ</sup>ま<sup>マ</sup>ぶ<sup>ブ</sup>ら<sup>ラ</sup>や<sup>ヤ</sup>ふ<sup>フ</sup>二十<sup>ニジュウ</sup>と<sup>ト</sup>集<sup>ツ</sup>ま<sup>マ</sup>い<sup>イ</sup>る<sup>ル</sup>

口<sup>クチ</sup>を<sup>ヲ</sup>と<sup>ト</sup>づ

歌<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>を<sup>ヲ</sup>ま<sup>マ</sup>は<sup>ハ</sup>む<sup>ム</sup>ら<sup>ラ</sup>松<sup>マツ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>年<sup>ネン</sup>

有<sup>ア</sup>明<sup>メイ</sup>の<sup>ノ</sup>梨<sup>リ</sup>打<sup>ウチ</sup>を<sup>ヲ</sup>ほ<sup>ホ</sup>し<sup>シ</sup>送<sup>オウ</sup>り<sup>リ</sup>

け<sup>ケ</sup>句<sup>ク</sup>も<sup>モ</sup>公<sup>コウ</sup>羽<sup>ウ</sup>の<sup>ノ</sup>名<sup>ナ</sup>高<sup>タカ</sup>き<sup>キ</sup>附<sup>ツ</sup>句<sup>ク</sup>之<sup>ノ</sup>前<sup>マエ</sup>句<sup>ク</sup>の<sup>ノ</sup>拍<sup>ハク</sup>子<sup>シ</sup>ふ<sup>フ</sup>

の<sup>ノ</sup>め<sup>メ</sup>く<sup>ク</sup>え<sup>エ</sup>も<sup>モ</sup>い<sup>イ</sup>は<sup>ハ</sup>ぢ<sup>ヂ</sup>め<sup>メ</sup>で<sup>デ</sup>た<sup>タ</sup>し<sup>シ</sup>句<sup>ク</sup>の<sup>ノ</sup>拍<sup>ハク</sup>子<sup>シ</sup>と<sup>ト</sup>よ<sup>ヨ</sup>

を<sup>ヲ</sup>し<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>へ<sup>ヘ</sup>し<sup>シ</sup>句<sup>ク</sup>を<sup>ヲ</sup>え<sup>エ</sup>は<sup>ハ</sup>お<sup>オ</sup>の<sup>ノ</sup>子<sup>コ</sup>を<sup>ヲ</sup>な<sup>ナ</sup>し<sup>シ</sup>

殿<sup>テン</sup>さ<sup>サ</sup>が<sup>ガ</sup>糸<sup>イト</sup>を<sup>ヲ</sup>と<sup>ト</sup>づ<sup>ツ</sup>り<sup>リ</sup>つ<sup>ツ</sup>る<sup>ル</sup> 松<sup>マツ</sup>ぼ<sup>ボ</sup>ら<sup>ラ</sup>け

え<sup>エ</sup>げ<sup>ゲ</sup>る<sup>ル</sup> 眉<sup>メイ</sup>を<sup>ヲ</sup>か<sup>カ</sup>く<sup>ク</sup>さ<sup>サ</sup>き<sup>キ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>ぐ<sup>グ</sup>

け<sup>ケ</sup>句<sup>ク</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>が<sup>ガ</sup>め<sup>メ</sup>り<sup>リ</sup>よ<sup>ヨ</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>べ<sup>ベ</sup>き<sup>キ</sup>付<sup>ツ</sup>く

除<sup>ロク</sup>勃<sup>ボク</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>を<sup>ヲ</sup>ふ<sup>フ</sup>思<sup>オモ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>る<sup>ル</sup>ち<sup>チ</sup>よ<sup>ヨ</sup>し<sup>シ</sup>

侍<sup>サマ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>の<sup>ノ</sup>侍<sup>サマ</sup>ハ<sup>ハ</sup>階<sup>カイ</sup>を<sup>ヲ</sup>と<sup>ト</sup>づ<sup>ツ</sup>る<sup>ル</sup> 中<sup>ナカ</sup>

除<sup>ロク</sup>勃<sup>ボク</sup>を<sup>ヲ</sup>ふ<sup>フ</sup>何<sup>ナニ</sup>も<sup>モ</sup>と<sup>ト</sup>ち<sup>チ</sup>ぎ<sup>ギ</sup>り<sup>リ</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>モ</sup>侍<sup>サマ</sup>り<sup>リ</sup>び<sup>ビ</sup>



思ひ予一たるはよなる里は心は待らぬ何めて  
やうく陸のなるは只ふまゝのたるこいつとて  
の附合あり一白ハ陸を待て居たるが待ら  
ぬ何れも陸ハるもの中ふ階たれとつと  
ふきとゆ水どはよハ何らむたむ陸のたのこ  
とをやは一といひのべたこと

京小 汲きくる 碓井の水

玉川やねのくくといつたのふ見く  
凡俗のえき人々の水かこの水あをよまべて  
水をたのむ人之内きば玉川のといつまで

りみ一なるべ

餅つくる猫の、廣菜を折合を

誓ニエ見ふ笑る 秋乃とくるハ

前句猫の笑乃餅つくるをあき汁り  
見くいけよえよ笑る人の何れあるまが  
をつけたり秋のんハ秋の字あれが  
たえろをつくきり

姉待牛の、一連支日の教

狗何れぬ越の宿キヨを織うぬく

姉のほきを待兼るをふのやうさてちび

附合  
三三三

扱ふむらひちあぐら お思ひぬるはよこ  
誼のこりまて 女まことの並びおて

卯月乃雪を 握ニギるつくぐね

前白田植の海もりなるふ雪を握るとよ  
りを阿わーらひたるこ

思シひぬ 半をうとて 傀クイ傀

途中チカふたくる車カのふ座スを揺る

おまーろき 附合之車の申ふぬるふお思ひ  
の何る人なるが 傀傀のこころま半をまきつて  
おーやわがまの上をこころまふの何らぬを揺

乃きこくまづーと車カのふ座スを揺るよはまふ附

たりお思ふ人ニの本懐 待りゆくかくのこころ

志らむ

老の身此 覆フなるふほどふゆるりる

君 流リりきー 海ノ 冴サや

前白老の身此 ぼろりゆへハ老なるがら 覆フなるふ

ほどふおらへころみとくこならぶお思ふ人

と見く 極老の冴サさくー なる世の中こ

だれて 尹トさへ流リる水ぬひー 海ノ 冴サさくとふ

ろく 覆フなるふほどふゆるりるこころのつめをえ

らーちよ之

木の葉もちよ 榎の末も 神無月

つゝ 侍りぬる 崎乃くひもわ

前白本ざりー 吹立榎の本の葉もたざりくと

ちよものさざざきりー きを碓ふと見えくくひ

ものさざざー た流人の何りぬるさうをけ

たさと

い葉をくむささく 藤ぬりさ

火ありー 侍るをのこハ 何共ぞ

前白川ざこのちひささきい屋み敷ふくるまで

藤もやらざりつゝ さのい葉とさなるふふ炬をど

ありくく侍るをのこハ 何共ぞささくがめくるけ

たおみける何りさ海之山とえの炬ツツ 籠ひ

らひの炬るなるをー

はまぐくのまれうをりル里月の歌

人一代乃 恋奴とさ秋

さほぐのかをりつゝ すり次ハ 恋の白と

あーく月のおふたのく 侍むげものかあ

ー てたぐひよをさなるた時すりの夜をつ

まさでものがぐるはまを お侍りもかふる侍

何里かきしるき附合ありらま

下戸をにくめる雪の敷乃亭

早咲の梅敷ふたとへたり

白雪の敷乃亭に待たざつり酒をゆ

きるが中ふたらく下戸あるをのこをそめ

たりしや片ま次の句をそけく早咲の梅

を赤身ふたとへたの水とおの水敷なる詩人

酒後の懐をいり

明安き寂寂まきらか後立ちく  
あふよきを啼ゆくほくきささやら

あまのこをりきつげどろ之前句其の敷乃

明安き寂寂めよりほくきまをやう海

く後立ちよつ小情能之ありぬをくらき

うぬをかつ風流才一のほくきん敷かつ

くりく風流公お小何らぎく後そや

舟よきむけ名月をたぐよやハ

若るあるのつぎ寂海を罪さ

前句は名月をたぐよやハまぶさべた何ぐ

小舟よきくたのどつふさま後句ハたぞよその

の舟よきく使の若る妻もちて寂寂とえり

附合

三十五

まがくともよりかゝるる深さなるほどそ  
ばのみつぎげうりハゆるさくあらむくをうり  
いひたると

稲妻の光くすまきバ筆投く

聖中のりく礼片禮をまぐ

糸白ハ増居るどしておろきぬるふハ稲妻の  
光りするふゆるき筆をま投きくたす  
がとあれど後白ハおろ中よ然どくえと  
りく水片禮をぎくもどるほどのせつる  
ゆふかへたると

ゆふ屋平 かるを借る 旅人

命ぞとく子のまき可成 懐平

附ぐるハ旅のまき可師の血たけりゆの  
くふ下りくゆゑあるまき可一と著て旅  
ゆよなるりたる之れ水バるの月れまき可を  
懐中くまことよわが命ぞとちりゆけ  
ははまこ

汐ハ干く 砂ふみく 浪ノ浦

日毎小かたるる 家をまほひく

浪ナといふより 源氏物語浪ノまきふか

の頂上ハむのしころ人もさみりれ今ハ里は  
あふいとろろがそくくなく何をも起し  
あくめよれはあくとも在ふのきぐこハかる  
ものなり

と念ふ事とは楢の本乃中

聖ミツリして聖アミシなちがら此月もこつ

楢の本乃中よ事とる念ハひろふ念  
固の人ならむとかくつけく之西行の撰集  
抄などよ越え何よべー次の句禪念のや  
ふいひうけり聖法何とをりく聖乃

中の月をもつと何となく禪念禪徳よまき  
とゆゑやに何やあしたる之世の依指を注  
するものかゝるものを何くの禪徳何の  
禪念などけまぐふ解まぐら依指しらぬ  
もの、志のぎあかりも一け句よもせよまことよ  
禪念禪徳ときバる此ハ禪念禪徳よてこそ何  
礼依指ハ何ら、あはよかぎらざあきり  
あどをふくめよ句やも底ぐるよたがろ  
けく付のしゆるよてこそをり、らんちつ  
けよそのさるのをいひてけたらむハいつか

くなぬるべしかゝるものふか時ふあしつゝも  
のし従論ふらるゝくつひつ

目赤のりーたそのまゝ 待し他り

ハッふあゝる子乃 顔はげなま

まぶくふけつけ向きても何き目赤のりまを  
たちあち待し他るふ才子のつれと見て玉我  
なごのり成るふふくめれどろのりハぬく  
とまきまゆゝやゝにつらりたの毛のなりたこ  
けつけ向目赤のりーまをろのまゝ待しつゝ人  
を大人ハとハをハからハ志子のハ見と見

たゝふぬ之心をつくべし

小畑はひーたカ山子 他らむ

の戸は馬をハ僕ハたさへつれ

をのき附向うくくろろ何まき前向のや  
そ風粒のまぐぐと見くかぎりなきコウ飲  
秘ハの人をつけさり日く数升の酒を飲  
くろは價奴何があよりあからだつひまを  
のたのよ馬をたさへらりしるる之世を証す  
間よからるガウ社ぢけ人あゝべし  
一ハ家やガウ居ハ虫のなふありなむ

い代ふ出く 海苔 さくらふは

茶向世の中乃俗物をさけくろろりある。  
ものたくりかえん家小作り何よけまを家  
世のなつひたる。之家後世の家としてちひ  
けきふふたへたる。より何りかゆくハるのん  
をさふくあり後向ハ水色ハ水色ををつけて  
たぐその以時ふを何いさるもの。之ふりさ  
んちや

新白の音すなぐらふふびき

月をほくく。螺の証

茶の向新白の音乃大なる音をすてもなるり  
む高軒かきく。ゆり居る人ハ鳥羽の佐  
の碎石と見えく螺貝よて知やしたる大  
おまををつけてる之志や。茶向ふいびきと何  
まバ自の向よて碎ぐらふくつらくと新白  
の音をさくぬく

辛螺からの健流る 磨水

角何る眉小 化粧さるる

はがゆぬえの控るは魚のふさき命。さも乃  
老のけいひといひ。たぐひうつけぐるけ



うたならむ

歩 さま 采の 出敷 川口

標干小 頤 オカ をさうぶ 夕きをみ

お向の 坊ふをさぐふつけく 水橋スイハシの 標干ふ

頤うちあがりへく 川口の 出入船をさうぶめぬ

けーきき

幼月子 外里トサトの 娘乃 川邊ひ

蔭ハまねく 荊 被ひく

娘のり ぬひまきを 在ふの 及く 思ひやるを

蔭ハまねき 荊被ひく 娘のかんよ

なるべし せりき 借替のつげ白之

わたり 舟ねも 明方ふ 山さえく

陸いくところ 西り 東り

肥前ノの 山河

涙をさ えく 鄙の 橋形

歌なけづる 態の 健乃 名もつらく

前白 涙ながらふ 櫻お 一首よみける 鄙人の

懐乃 せつなるに 後向ハ 舟の どの 向れやふ

志とて 歌の 健乃 名を 態の とつふもつら

しとて かく 櫻お ぶよと たるは まよつける

併答 此

たり

うきまをふてたうちも樹るぬ

父乃軍 成 起ふ のるな

うきまのさうちもむなしくるるといふより父  
ハ軍ハ出たがられたのが身ハ痛ふしく父よも  
まごぶよりあらむくちをき月日を送  
りしく起るもあしくも父の軍をさるる  
孝子の情をつけると

三度ほい したれ 勅チツの古え

山が車ふけづる本をさるひ

かれふ酒阿こよとみことのりぬふちからけ  
を三度まぶほいといふのうきまなど  
思ひよせて山がふたまりりさるとつけり  
度やれしく月ハむりしの親をがら  
老むむらむが衣うつさる

茶向ハ末指花の巻乃れもうげをさるふくめ  
り後向も其場之

道の色れ松ふ一喝イッカッ志めし金

長者の 塵コシキ 習をなげとむ

茶向ハたぐまき 祥僧と見しく 長者をもの

併答 此

二十一

の教ともせむ。塵ふ習を投こしたる。粗慢  
れきぐくをつけり

廿<sup>ツ</sup>火<sup>ク</sup>ノ 短冊つけく 放やり

々 益を 脊負 けぐ 臣

つばくらふ短冊つけく 放ち 益ふ益を 負  
はま何ぐ 大主などいふもの 抱びあるべ

し ちれも 何の 對附あり

狂々 強あらしふ 定ふよらばや

お 持る 乃もく 之果の名を 忘き

附くろ 之果を もらひく 隔る 乃も 狂々 のぬ

乃き 之ゆ 定ふう ちよりく ちや ぬる 官に

大りの 之果の名を 忘れたる 之前 句 優<sup>ユウ</sup>艶<sup>エン</sup>

なる ぬふ 次も やら しく つけり

酒ふ ぬい 何 友を 何つめる

ぬ け ゆる 又の 一 齒 乃 かなり しく

は つけ 句 翁 小 ね 不 ぎ 換 あり 共 句 八 ね 道

ろく 酒の しく くら 人 ちの せを 引 替 けて 益

齒の ぬ け ゆる かなり しく つけ ける もの 是

は けれど 毎 理 ち なら ぎ 又の 幸 賀 或 八 め で

た だ お ぶ 不 ぎ しく 又の よ 八 ひ の かく ぶ きた

はをかあしめる孝子の情之かく茶臼ふつ六  
れむ引とあしつけるハ名人の手段あり  
まのれども如論茶臼の挽杵時のよろし  
たふまてふまを

山さるハ登も 狐のはま登る

花とひ束やと酒つらほら

登も狐の何らあるさハのやど山ふつさふと  
見く花ふ人のとへいせくつくるらむと  
つよつけ合之茶臼のころよてハ山さハ何れさ  
のちひはささるといふがもれも後句より

将どく大地の山さくはは

白きお襟の垣を飛ら

循ちりを標の 根ふゆめまて

茶臼春日のねどなるにハらくお襟の  
垣を飛らまけまを毛扇なと見くよき  
日和哉見ハせて循りりね何らひあむる  
女のゆりげをつける

洞なた記念の鞆 ちるも出む

何も 焚火ふ皆つら

茶臼ハ天鞆といつる 徭もの侍く後句ハ人

のちくけりくる けのけりあまのけまよらけ  
はあり

信 拙ゆし 主の教陰

本 名<sup>ツキ</sup>のたのが 礎や 留ぬらむ

たぐその場ふれ附合之本名<sup>ツキ</sup>の茶を礎ふ  
— ぬるあし階督

才けりの侍中申ふにくまひて

穢 ころし たる 小縫 ちりけむ

ぬ人め子の情をつら— たり平生に教多く  
おひひけ— であど— 侍中申ふにくまひて

のたまく 小縫 ころし たるを— みるの—  
ふいひたる— ころし— ぬ

船 追のけく 踏の 喰飽

音や— ハあらづる 神乃ま—

ともよ— けり— まりあた其訳のけりたき  
世に— あり— ぬ

おねとを 白田も 花の本陰よて

つらも ちつお 小縫の 卯わる

春うらこ 目茶とく ば才二葉よ 露べ—  
おとた— ぬ— ち— 持のと

ともーびの糸めづらーたきのかえ付

も持のよふ顔思たみあしく藤もさぬやう

さをそのえ付と思ひよとさるこ

いうやうの束も志つべき存実

翌比翌巴をかえしく出る糸お

古ものかくりよもあまげを思ひよ

せしく翌比翌巴をかえしく糸おすり出る人

ハ何ぐーの君乃いふそのこちのよー

宗長の夏寸 白も筆の端

附えきこえさるやまて一際おさやうならす

綴強き袴ふ秋をうちねと

白賈の白髪をばは具付たり

前白袴の綴乃強さをうゝあるとつよを杖

の字ふ心をめしく衣の身よるぐんぎむつ

しくおがゆゑ人の老さるちやりといふさうて

たドめしく白賈の白髪を尺付て老を後ま

よをつけり

わが顔ふせぬうりたるおまの花

綴ふお鏡とアーさうづき

梨木の花のものとみ極まりきる。人あらば故様と  
いへる盃ならむつけ向のあぶきぬといふをしと  
てよハ何の化名あれはいうももなづくべき哉  
故様といふよて類ふ花のちりかきる。た  
らぬがぬー美ふふうく味ふべた附向と

甘藷あまきりしハあつろとあつらだ

粟稗を日毎の <sup>トキ</sup>あひ喰ひぬ

あふといふ一字わては言とさるせりもといり  
も捨身の行あれはいうなる。里いりあふふよま  
つるべりれどさきでぐる <sup>ニク</sup>肉身あふはかしくなる

里ふくろとまらば毎日の粟稗ふらむど  
果々いちまいとをうー

け秋も山の板橋 <sup>クツ</sup>あひりり

赦免ふもゆるく <sup>ナム</sup>ひとりける月

赤白あましく子家の柱もあき株木も朽く  
山の板橋もあるといふあきま。きふを死ふ  
と見て赦免ふもは一人とりのとけき一流  
人をつける之 <sup>ニク</sup>儼實が侍もあふべ  
もとの <sup>ツル</sup>廊ハ細キ <sup>ニク</sup>徳ルる  
し重記乃春も一ふふあつらたまり

白むらゝハ抱女町まゝく鯉之舞あり  
ふも今ハ名の〜飾り〜ハ糖細小形り  
お撫り星うつる内まを見く壺取も何ら  
たまり〜とつける之廊に壺取とりひ  
びさあり

去の雪小主人何れとや釜加て  
麻巻あがらふ化粧つ〜  
前白ハかこひをぶつ飾りて着茶を  
たてたよ雪の如きをけりてきし主人は  
何〜らむ〜と答へてよりか〜り〜風流

の席を懐向依の川村〜く左平あどの  
抱女乃如屋と〜たつつけ合之  
鑿<sup>キウ</sup>牛<sup>カウ</sup>の売<sup>カウ</sup>を踏<sup>カウ</sup>つがさる  
身ハ蝶<sup>アリ</sup>此何なるといふや笑つらむ  
さ小ららあ〜き附合あ〜と一合を〜  
いひのべたり惜牛の売を踏つおすふ様も  
とも小踏手たよ之蝶の何なといひけり  
めたつ秋月を竹枝たよ見て  
出 澄泉<sup>パツ</sup>の舞へる 陸奥の秋風  
〜も壺ふるの〜をつけるま〜た附向

附向  
出  
六廿二



あり

何の時ハ解もも後の入ぬらむ

樟の小枝小葉をへだくく

日向うき葉小思ひ一づみく樟もも後の  
入はだりりある之後向ハ樟といふ小樟をつ  
けく葉を何つうひたる之

霜降山や 各処友たもうけ

何よりハ軍をささるる家よ来て

山よおのりくゆる何りけまふ娘の面影の  
さくくありといふさきさへいけたるは不

をろのまづけく軍の出立をいふまで運

りくくゆるのほりさるるくさく

新引雪車ひとぬのた有て

木のく武士れ冬ぐもるの宿

前向ハ小越の大雪山あるべし後向ハ小園の  
城を攻むと大軍たろひ事候もかの大馬  
小馬の蹄跡さくべしも何らさむなりく武士  
れ冬ぐもりおて春をおつさぐこみや

空より水くき名恥り

手枕よりあき枕をいへく

御合 廿七

お向たるけちなくさきの水添部をゆるら  
まぬらさし女有り後向ハそのまゝくその  
あゝくわりなき契のほぞ何り水と

位かへる宿の柱乃月を見よ

いほ何くらむといふ葉がけ

いづもも解しが

ち山つづごこのまきし

淋しさを河さるもまきし

附向もつけまきまきとえくましく冬旅と

ありいにほひ入る人もなくち山つづごこの

つちのまきし

花をたるとみちびきて

酒の迷ひ乃ちむと

前向ハ馬ふまきし

後向酒の迷ひのちむと

水ど抱けをみちびくとつち

とびぐをたるとちるさつく

馬市くみし

標けし父が引

附ぐる馬市ふ出るほどのもの

馬市

馬市

なまいるれなるれど駒むらへまいつもくし年  
久しく出る男ホてい父の代より流りける  
弓の糸をもちつこへたる古き家あらむわ  
雪ヨ降ぬ松いたの氷とふりゆる里  
社 踏 志ける 杖 乃 妻  
米白何りのまき之後向も深き山と見てい  
のーと思ひよりりたり林子むといふあり  
妻とてきて志りてをさる之にろろとさげぞ  
ものをかくやけりくつらりたるに山人の身取  
たり

蘇 洗ハむとそあろくぐなり  
おのの今ハ衣をさそぬ  
いなる附ぐるるまや  
牡丹の 七下 風不のりあり  
老僧のいで 小盃たぐめむと  
おの白園の牡丹乃夕きあをふくめるふら  
ろよき風たろよくと吹けりさいうもをた  
の庭と見ろく牡丹見の極もゆをつけるを  
秋更ろく枝子小か内む若のい立  
くひままをるみ流の谷役

掛子の何ごころもなしくく喉礼哥ごもひす  
ほきるありれなるはまをのづるつけごろ  
ならむり

水株のきろふ見ゆる 舞火  
奉 執 供 水の 著 ち 誂 ぶく

水株のすろ小見ゆるは舞ハ供巾の著をとるな  
らむとの俯えふや

牛の子よあゝるなぐさむ夕暮ぐれ

る雲ま——ふとらるの 唸  
さくえがく——まひろくさむむとまらばれろく

ハひがきくせむ

松むさをびたしく 木の境目

永楽の古きす 頌をいたきて

永楽の代よりお朱不たまりく寺頌  
テヤ 載のすなるべ——俯えいさくえたるま  
なり

捲上るハ屋ふ 兒の遠入く

わづらふ人千 昔る 秋風

二句のユ合漢も落ぬべ——ハ字を捲上る  
兒乃遠入にうちあその母をどのやこ

たゞに秋風をいそひたるはるの

子 淫 蟹 いとちむ山陰乃塔

様多村の浮世の卯は春家て

除きさるるなりたゞそのをを春家とく

星みふる夜ふにふ夜友のかるよと

まふ子 拙女の名をとむむ月

お向ハ星みふるわりき人おかざらば夜ふに志

髪のかはまぎくみふるよと後向ハ七夕みふれ

なくおよと或ハ吉人のおをまて何とみふ

のあふまふ出くる拙女のおかざらば

かついやーと拙女もておをよめばとまふ

入りくををとむむよとくわとたむ

あふべー

はまふ出く家陰志る

弱ふと候本信をに星のかげらふ

けのむむなり

雪みふる沙をの市は名跡とて

帰ハさるの日を 暮る夜のあふ

帰ハさるの日ゆお居てもはるがくと暮る夜ふ

あふくうのあふりーハ依階の連年を

舟

舟

つふものなるべし 俯さるるに 鳴らうと  
やもめ 鳥乃 半違ふ 晩鐘  
平つゝ 聖<sup>アス</sup>も 越なき 花の峰  
俯意ハも 旅のりふも 泣いて 聖に又つづの  
つゝも どのの 山峯をこえ むと 思ひのやふた  
う なるさるろーく やもめ 鳥の 鳴をきいて  
まじぐ ぬま子をおき 妻よ たるふし ときを  
あよ ねも むくし ころろろろ なるき 旅のゆよ  
ぐれ ちのらむ ちれど 花の ぬち 水が ちど ち  
むろ ころも ねやーの つけ ころ

教くふ ねのお乃 指つゝ ころ  
後 ち ころろろ なるき 旅のゆよ  
ころも 何の 箱の 俯右之 前向に かざり なるき  
ね ころろ 指つゝ なるき なるき なるき  
ハ 後ろ つけ ねも なるき なるき なるき  
ね ころろ ねを つひつゝ なるき なるき なるき  
何ひ ころろ なるき なるき なるき なるき  
なるき なるき なるき なるき なるき なるき  
鐘の 羽を ころろ なるき なるき なるき  
春 ぬハ なるき なるき なるき なるき

時 六  
二 十三

前句やあ〜く何れなるふと見〜く見の終  
 りる音とつげたり 鎌堀の乳ふ見をすえ  
 くり 刺刀カニノリいつらま反情いりよ何れなる  
 らむ折くらま毎片一降〜く志めやのなるふ  
 見の〜りに後りぬま〜くはざらむかぬて  
 鎌堀の乳ふ端の羽を〜むを見の終なる  
 体小た〜へたる之  
 御道ミチノにそのあなたまで切せづめ  
 松うさねらふ 衣 徳のちまは  
 何れのま〜なる 附合あらむり

ちま〜この神ふいのよかぬ〜て  
 供〜く常あきよま 思がらむ  
 前句い〜く〜くふま〜く〜つげ〜るに 怪コトミツえ  
 などの付あらむり 君の思びゆきあふふに  
 志〜がひて君の志乃〜らや海〜きふ常なき  
 手〜くまでもた〜く〜く志のり〜く〜と〜さ〜から  
 へた〜たりむれ〜ひたるさ〜ま〜さ〜め  
 乾づ〜め 妻カメ帯タイ するの 袴 乃 奉  
 り〜も 命と 時乃 くらん  
 前句に何れなきなどの乾づ〜め〜く〜ら〜ま〜

侍の志年乃きこゆるふ無名を親にて時の  
と名にのりゆも何事とも何ふ事のづゝらむ  
と有り水とあるるりをつける之なるや妻帯  
さを崎と見くる附合之

おぼろの鳩乃藤ふの月  
ものいば本意ふびく春乃具

はきこえたる

糖をねきむる 塔の何らせ

幼をねばりなき心を化糖ら

附ごろ人を埋める塔の何れおぼ

幼をねのねくを見くよりなき心ふねの  
おきくくうつらげよけり中ひいらぬ  
ある中くふかありけのまはるあふ  
へはよや

おとしめむ唇を徳は生きて  
月はへ凄き陣中の市

お向おとしめて料理を唇を徳は  
のけきくくは懐向むづらなるや  
あふのふふ何らむく陣中の志年物と  
はたさくらた



小徳勝を緝る戒の師

わがぼむの母ふ似るもゆりて

赤子のヒユコ戒に小徳勝まで戒師よりた

ままゝなる之かゝるおぢさまつゞくとも

わがむの聲の母ふ似るもゆりて人結

をつくさる附合あり

あふらの束おつとぬる古分集

花に射きほつ坊の酒の花

前白いうのもあふらに古き古と集も

何るぞし附ごるらそなたと集も

たふはあふらの坊と見く花の似ふ坊の酒花  
ををひらく

春ハルだぬ動きくハル常トコふふ

徳木をつくりて古た意を見む

春ハル羽ハネさるふをみちのくもひよをてふ

一のめく徳木つくりて古き世の意乃

はまを見さたといふ附合あり

飛トビくハハ豆マメのカゲ降りふカゲ立タぬタく

百望の旅を本曾の牛道

目筋の総弁

豆くくぬ杖ハ何とちやく鬼

古の祈を寺ふちやく ヒツカダキ

古は不致すに取したらむいさめくもの

まごく思もあくらむの白ハ中かの杖の

外ハ思ハ何といふてなくちむくの情秘之

月見よと引起さく心 ハ

髪 ウネモ 何ふがさくる ハ

前向やうりあ ハ たる人をさばりりぞ

たあきものうハ志 ハ 起く月をも見ぬハ

く ハ とゆきりねとけい ハ くるが ハ 起 ハ くる

後向やぐく ハ なた人と見くのでたき ハ ま ハ をつけ ハ くる

白的 ハ 場の末 ハ 咲る山吹

春を ハ 経 ハ 七ツの季 ハ ちうら石

七ツの季乃ちうら ハ ため ハ 引 ハ くる石のを

とあふ ハ ぬりても ハ 忘 ハ 水 ハ 思 ハ ひ ハ 出 ハ き ハ 存 ハ なるべ

ちうら ハ 石 ハ 的 ハ 場の何 ハ 小 ハ 何 ハ べ ハ さま

なり ハ さま ハ べ ハ かく ハ ころ ハ 衣 ハ 家 ハ 小 ハ あり ハ あ

る ハ 的 ハ 場 ハ と ハ 小 ハ あり ハ つ ハ け ハ あり

かさ ハ 備 ハ る ハ 衣 ハ 小 ハ 聖 ハ 中 ハ の ハ 地 ハ 花 ハ まで

つりとさるる山太の七年

前白ハ世中の地蔵の妻小春と云ふ子  
階智あり後白ハ世宿たど一たると  
見くくの附合之

鳴子松、ろく片、寂の室

盗人ふつれそふ姓グガを位て、

前白ハよのつね此田舎のたまなるを川  
樽トく盗人の宿の鳴子小春と云ふつけ  
向ありあつるならん盗人の妻とありて  
身をくやとあるとる何れ志べし

秋の里 待の 宿 廻ハ 待

ものいハ小ハ立小顔をかしいる

前白宿廻に秋の里を隠かきた。風流の  
まぐさたけりまきり人乃面釈ありてた  
しうふ誰ともけりかきさやうまを後白ふ  
ていさでたものいひけりまきりまきり人  
りしとまきりし小ハ立小顔かしいれてまらぬ  
かふもてあしつたむりく内まこ

盗人といはた 二十ハ一の里

松の根小ハ及をたあらべくまらむ

前句何となく水ごとくろくの里といふ名の  
 何やしたふ盛人のをるべきふとくゆ悔句ハ  
 きなはちろのねろろししたふよふ十の歌をど  
 いふもの、唯宿してくふ大と一の歌とい  
 ふよて一しふといきやうを見えたり  
 何の月も意ゆ意ふとろ然しん  
 意ゆともささえぬ 猶のいさきに  
 意のまことをつくさる 附合之意何れハ  
 ころ月を見てもかたしん水といふ月干  
 意ゆとつけて意ゆともささえぬいへるとかほ

衣をささて 強き世の中  
 酒のめバ谷の朽本も 佛あり  
 句の朽もてハ衣をもちまてくものよもかま  
 ハぬをことを教免の証佐と見く酒に研  
 たる目よハ谷の朽本も佛のやうにみあると  
 いへる附合あり水と意ゆとろハ衣をささて  
 世の中を強くささまむといふハもと及心何  
 をとては素心つらりねどたるとして朽本  
 佛ありとつけてるあとの手取れるべし  
 洞の地は花ふら物る みる暇

昔の菊の穂の泪や深つらむ

山陰 葛 翠

冬を隣々 流人 某州

くふも又昨日をねむ石のうへ

まことふけつけ白涙を流るべしとくむと

まればかへつゝ 竟成 換去ふう、モクニヤ 然後去

登一

芭蕉公羽附合集巻評注上巻終

